

新批評の父たち

——南部農本主義者の共同体——

越 智 博 美

確かに、南部には、そして南部文学には「後進的な南部」の描写がひとつのテーマであるというイメージがある。フォークナーの描く貧乏白人 (Poor white) たちや奴隷制が終わったのちも息づく人種差別、あるいは一九三〇年代のスコッツボロ事件を下敷きにして公民権運動のさなかに出されたハーパー・リーの『アラバマ物語 (To Kill a Mockingbird)』(一九六〇)も、南部の人種差別が「昨日のこと」ではなく連綿と続くことがらであることを知らしめる。

そのイメージが創られたのはおもに、一九二〇年代、南部が北部からその後進性を批判されていた時期のことである。その後進性を象徴するさまざまな出来事、なかでもスコープス裁判をきっかけとしてヴァンダービルト大学ゆかりの人々を中心としたモダニズム詩雑誌『フュージティヴ (Fugitive)』(一九二二―二五)にかかわった詩人たちが『わたしの立場 (I'll Take My Stand)』(一九三〇)という反動的保守主義宣言に向かっていったというのはよく

知られた通説ではある。そののち彼らは、今度は新批評家へとその重心を移動するわけだが、新批評をペダゴジーとして広める途にある彼らの言葉使いは、農本主義者として名を馳せていた頃と変わらず実に戦闘的である。⁽¹⁾こうした戦闘性はいわゆる男性性と言われているものの表出と言ってもいいだろうが、しかし、なぜそれが男性性というかたちで、表出せねばならないのだろうか。

本稿は、新批評家の言葉が孕む伝統主義の男性性の源泉として一九二〇年代の南部批判言説やそれに対する農本主義者の対抗言説がいかにジェンダー化され、それがさらに彼らの創作活動や、批評の言語に連動していたかを探る試みである。彼らの批評の言葉とその政治学が最終的には冷戦時代のリベラリズムと手を結ぶことになるその土台には、彼らの批評の言葉が、冷戦時代の新たなマスキュリニティ構築を内包するリベラリズムと通じるものがあったであろうと考えられるからだ。

I 合衆国最大の問題、それは南部

ジョージ・ティンドールは「暗愚な南部 (The Benighted South: Origins of a Modern Image)」(一九六四)において、伝統主義者が頑固に生き延び、野蠻で人種差別が激しく、狂信的な宗教が蔓延するという南部のイメージが、おもに一九二〇年代に創出されたことを検証している。彼がその媒体として言及したのは、まず北部のジャーナリズムである。それは例えば、『ネイション』、『センチュリー』、『ニュー・リパブリック』といった知的雑誌であり、さらに個人で攻撃を加えたジャーナリストとしておもにH・L・メンケンの舌鋒鋭い南部批判の数々であった。また、W・E・B・デュボイスがNAACPを通じて発した人種差別批判もその中に入れてよいだろう。

また、ティンドールによれば、当時興隆しつつあった社会学者の研究による南部研究もまたそこに加わり、北部から、そして南部の内側から学問の対象としての南部の病理が浮かび上がる。W・B・ゲイトウッド・ジュニアは『二〇年代の論争 (Controversy in the Twentieth)』(一九六九)において二〇年代の論争としてファンダメンタリズム、近代主義、進化論を挙げているが、しかしそれらの「二〇年代」的問題は同書にあっては、まるですべて南部で焦点化される、あるいは南部以外にもあった現象であるにしても南部にそれが最も色濃く表れているものとして扱われている。(3-45) それは、進化論を公立学校で教えるか否かをめぐって、教育のモダニズム、科学信奉と宗教のファンダメンタリズムが対立したスコープス裁判に典型的に集約されているかのようなものである。本章ではこうした問題をめぐる語り方の特徴について、代表的な事例を使って考察したい。もちろん、言説を分析しようと思えば、当時の文献を広く取り扱って調べるべきではあるが、人々の目に多く触れ、話題になった「代表作」もまた多く読まれたゆえの力を持ちうると考えられるからである。

まず、最初に宗教ファンダメンタリズムと南部との結びつきをめぐる言説を、スコープス裁判、メンケンの言論から検討する。次に、南部からの自己批判を敢行した南部の社会学者ハワード・オーダムが主催した雑誌の論争、同じく南部出身のウィリアム・スキヤックスによる激烈な南部批判『南部の独裁者 (The Southern Oligarchy)』(一九二四)が提示した「暗愚ぶり」に比べ、北部社会学者が冷静に南部の問題を分析し、なおかつ『センチュリー』に連載したことで読者も多かったと思われる『南部の暗黒面 (The Darker Phases of the South)』を扱い、そこからアングロ・サクソンの問題、およびKKK (Ku Klux Klan) に関してその語り方を見てみたい。最後にこうした言説にジェンダーが忍び込むことについて、ニーナ・シルバーが『再統一のロマンス (Romance of Reunion)』(一九九三)で提出した分析枠の延長線上でこの問題を考えてみる。

＊猿裁判で笑われるのは誰か

H・L・メンケンほど「南部叩き」で名を馳せた人物はいないだろう。スコープス裁判においてもメンケンがいかに南部を語るか、乞うご期待というメンケンがかかわる新聞『ボルティモア・サン』『ボルティモア・イヴニング・サン』の広告が出るほどに(*The Nation* 一九二五年七月八日号二頁)、メンケンによる南部批判は一種の定番として有名だった。メンケンにとっては、衆愚政治に動かされるアメリカの現状は南部に集約されているように映っており、したがって、彼のアメリカ批判はすなわち南部批判という形で表れるのだった(*Kneebone* 23)。彼の南部批判のおそらく最も有名なもののひとつが一九一七年の「芸術のサハラ(*The Sahara of the Bozart*)」である。要するに、ポトマック川の南は「芸術、知、文化」とともに「不毛」であること「サハラ砂漠」のごとし、という文章である。ここでメンケンが文化の不毛という時に使う語“sterile”(373)は、「不妊・無精子」、つまりは子孫に繋がらないイメージを持つ単語だが、しかし一九一七年の文脈でこの語を使うと、当時盛んだった優生学における「断種(*sterilization*)」を思い浮かべずにはいられない。実際メンケンがその「不毛」の原因と見なす南部の「貧乏白人」に対する形容は、優生学のそれである。メンケンに言わせれば、彼らは「不潔、怠惰、無知、獣のように乱暴、傲慢、貧困な野蛮人(*filthy, lazy, ignorant, brutal, proud, penniless savages*)」(375)で、祖先はアングロ＝サクソンだとしても「墮落」した子孫である。こうした形容のしかたは世紀転換期から二〇世紀の最初の二〇年ほど優生学の視線のもとで行われていた「貧乏白人」調査が使った用語「貧乏、不潔、酔いどれ、犯罪傾向があり、性的に倒錯(*poor, dirty, drunken, criminally minded, and sexually perverse*)」等々(*Way and Newitz* 2)と響きあうものがある。

貧乏白人は、有名なカリカック家やジューク家の例を見てもわかるように、特に南部に限られた存在ではなかったにもかかわらず、南北戦争後の南部に顕在的であったために、南部の大きな問題であるというイメージで語られるに至っていた。ニコール・ハーン・ラフターは、優生学に基づく当時のこうした社会調査が、「白人のクズ (White trash)」と貶められる貧乏白人に対して、貧しい掘っ立て小屋に住む「退化した (degenerate)」「ヒルビリー (hill-billy)」の人々であり、貧民、犯罪者、知能の足りない人間 (imbecile) を延々と生み出す元凶であるとのイメージを作り上げたことを指摘している (1-31)。しかし、「ヒルビリー」が特に南部の山間部の人々を指すことからすれば、貧乏白人はすなわち南部の問題としても構築されていたことと言えるだろう。とりわけ犯罪者や知的障害者に対し、本人の同意なく断種・避妊手術 (sterilization) を行うことを許可したヴァージニア州の法律をめぐる「バック対ベル」裁判で、連邦最高裁判事だったオリヴァー・ウェンデル・ホームズ・ジュニアが「知能の足りない者 (imbecile) が三代続けば十分」 (Degler 47) であるとヴァージニアの判断を支持した判決は、こうした優生学的な言説が公的なものとして流通していた事情をよく物語っている。もちろんこうした生物学的な決定論の言説がハーン・スタインとマリーによる『ベル・カーヴ』 (一九九四) をめぐる論争へと続いていることは言うまでもない。

メンケンによる南部の文化「不毛 (sterile)」の原因と貧乏白人の形容は、こうした文脈において意味を持つ。しかも、注意しておきたいのは、こうした後進性が宗教的後進性と結びつけられている点である。このような発想は、当時南部で力を持っていたキリスト教右派を形作るファンダメンタリズムの信奉者が貧乏白人の多くを取り込んでいたことと無縁ではない。とりわけ、ファンダメンタリズムが聖書を絶対視することから生じるさまざまな姿勢——リベラル (あるいは反知性主義)、反カトリック、反コスモポリタニズムが後進性と結びつけられて問題視されていたのである。

メンケンは一九二五年七月一〇日から二一日にかけてテネシー州デイトンで開かれたスコープス裁判について日々『ボルティモア・イヴニング・サン』(Baltimore Evening Sun)紙にレポートを送り続ける。その中で進化論に反対する南部の人々を形容した言葉は、「地元の霊長類 (local primates)」(七月一日)、「知能の足りない者 (morons)」(「ヒルビリー」(七月一四日)、「田舎者 (yokels)」(七月一八日)といったものであり、「貧乏白人」南部貧乏白人＝退化した人種」という優生学の図式をそのまま反映するものである。また、こうした性質とファンダメンタリズムを直結させ、反進化論側の弁護士のことをファンダメンタリズムの説教師ビリー・サンデイの信仰復興集会で改心する人間のごとくであると形容し、ファンダメンタリストたちが支持する「反進化論」の法律の下に流れるのは「類人猿のごとき愚かさ (simian imbecility)」であると断じている(七月一八日)。実際、スコープスが使用したジョージ・ハンターの『市民生物学 (A Civic Biology)』(一九一四)もまたあからさまに優生学の影響を帯びた教科書であった。

ファンダメンタリズムを反近代、反科学の蒙昧、あるいは退化のしるしであるとするこのような発想はなにもメンケンに限ったことではない。ファンダメンタリズムを批判する側は、進化論を教えようとしたジョン・スコープスを「真実」あるいは「近代」とし、それに反対するものとしてファンダメンタリズムを位置づける。たとえば、『ニューヨーク・タイムズ』の特派員としてデイトンに出向いたラッセル・オーウェンはこの裁判を「合理主義対信仰」であると位置づけ、テネシーを「原始的な山地の生活」の場、ファンダメンタリズムを産み育てる場であるとする (Gatewood 349)。また、リベラル系の雑誌『ネイション』(The Nation)七月八日号がこの裁判を伝える論説記事のタイトルは「テネシー対真実 (Tennessee vs. Truth)」である。その記事では、南部西部の諸州で進化論を禁じた法は基本的に田舎の、古くからアメリカにいるアングロ＝サクソンが支持するものであり、またそのような田舎の白人が

ファンダメンタリズムとKKKその他の「迷信」や「無知」の温床となっている、と指摘する(58)。七月二二日号の「テネシーのジレンマ (Tennessee's Dilemma)」という記事ではさらに、この裁判は国を二分するギャップの存在を浮き彫りにするものであり、南部の保守派が教育に制限をかけたことで人々が事実上無教養なままであることがその原因であるとする (Krutch 110)。同じ号に「無教養」な独裁者のせいで南部が今や国家にとっての脅威であるとするスキヤッグスの『南部の独裁者』の書評を載せているというタイミングは偶然ではないだろう。

この事件はテネシー州とファンダメンタリスト側の勝利に終わり、そのことがますます南部に無知蒙昧の地というレッテルを貼ることにつながったわけだが、スコープス裁判から八〇年が経過した今もなお、インテリジェント・デザイン概念をめぐる教育の場における進化論の扱いが問題になっており、またニューヨークの自然史博物館でダーウィン展が開催されるなど、進化論をめぐる議論は常に決着のつかぬ「宗教対科学」の問題、ファンダメンタリストを巻き込むという点では南部のアクチュアルな問題として対立を呼び込み続ける。

そして注目したいのはこうした言論にジェンダーが忍び込むことだ。とりわけファンダメンタリストたちはみずから行動や価値観を伝統的な男らしさに結びつけている。いち早く礼拝のラジオ放送を取り入れたことでも有名なニューヨークのカルヴァリー・バプティスト教会のジョン・ローチ・ストレイトン¹はファンダメンタリストのスポークスマンのな位置にもあった牧師だが、彼はスコープス裁判の後に、みずからの思い描くコミュニティを「騎士道」を奉じて女を大切にすると語り、「騎士道的な南部と頑健な西部の信仰と活力溢れる保守主義こそがアメリカを罪や恥辱から救い出すのだ」と言ってはばからない。(Gatewood, Jr. 356-57, 傍点筆者) また、裁判直前にファンダメンタリスト側に立った政治家のウィリアム・ジェニングス・ブライアンに「バイブルに対する答えはアメリカなのである」(Gatewood, Jr. 343)と応援の手紙を送った説教師ビリー・サンデイも、マッチョさを誇った政治家セオド

ア・ローズヴェルトの宗教版のような人物である。リチャード・ホーフスタッターは、サンデイが「女々しい」キリスト教を徹底否定する自分たちの態度こそタフな男らしさを表すものと見なしていたことを『アメリカの反知性主義』（一九六三）において紹介しているが（一〇四）、二野球選手のサンデイは世紀転換期、スタンリー・ホールらが警鐘を鳴らした「退化」の恐怖に反応し、新たに流入する移民に対抗して先住のアングロ＝サクソン男性の強化を訴える筋肉キリスト教の代表的な説教師であった（Kimmel 175-81; Putney）。

＊行き暮れる南部のイメージ

スコープス裁判のような「全国区」ではないにせよ、南部に関して近代主義とファンダメンタリズムがぶつかりあったのが「社会学」のフィールドである。のちの農本主義者たちの天敵とも言えるのが進歩主義を掲げるノースカロライナ大学（UNC）チャペルヒル校の一連の学者たちであった。こうしたUNCのリベラル転換には南部出身の大統領ウッドロー・ウィルソンが政権についていたことも大きく影響していたのだが、特に一九二〇年にハワード・W・オーダムが当時の学長チェイスの助力を得て立ちあげた社会学部は一九二二年に南部初の社会学雑誌『ジャーナル・オブ・ソーシャル・フォースイズ』（The Journal of Social Forces）（以下『ソーシャル・フォースイズ』と表記）を創刊して、北部からの攻撃を甘受するのみではなく、自らを分析する姿勢を積極的に出してリベラルの拠点となっていく。（Brazil 343-84）。

この雑誌は南部のいわゆるリベラル系ジャーナリストの代表格ジェラルド・W・ジョンソンの貢献もあって、単に学問の場にとどまらない読者にまで、南部の自己批評を発信する場となるのだが、それだけにこうした姿勢に対しては当初からファンダメンタリストたちが神経をとがらせていた。そして、それはついに一九二五年、正面きっての論

争に発展する。スコープス裁判が起こる年のことである。この発端は一九二五年の一月号に掲載された二本の論文であった。ひとつは後にアメリカ社会学会会長になるルーサー・L・バーナードの「進歩概念の発達 (The Development of the Concept of the Progress)」もうひとつがニューヨークを拠点にする社会学者ハリー・エルマー・バーンズの「社会学と倫理学 (Sociology and Ethics)」である。前者は宗教の出現を完全に人間の創出とみなすものであり、その点がファンダメンタリストを怒らせた。

バーンズの論はもっとと激越で、宗教の与える倫理が「迷信」(214)に基づくものでしかない非科学的な合理性のないものであり、社会の進歩の妨げでしかない現代の宗教はもはやグロテスクなものでしかないと主張した。バーンズは、スタンリー・ホールによって、“*morale*”と名づけられた身体、精神、社会、産業、環境を最高度に高めた「高度の衛生状態」を達成するためには狂信的な聖職者などは不要であるとし、YMCA、KKK、ジョン・ローチ・ストレイトンらをその不要な例として名指しにする。ホールの議論をファンダメンタリストや筋肉キリスト教徒が利用していたとすれば、バーンズは逆にホールの議論を彼らから収奪して批判する。しかもその際、バーンズに言わせれば昔の「本物の文明化された紳士」で「騎士」であった人々を彼ら「へなへな (*slinking*)」したファンダメンタリストが追い出したということになり(221)、ファンダメンタリストたちは男らしいどころか、逆の性質を帯びたものとして描写されることになる。加えて、バーンズは優生学者フランシス・ゴルトンを引き合いに出して、人間の進歩は能力ある少数にもたらされたものゆえ、倫理についてもそうした少数が大量の知能の劣る者 (*moron*) をリードすべきであると述べ、あたかもファンダメンタリストたちが男らしさが欠如し、なおかつ知能の劣る者、あるいは退化した人々と取れるような書き方をした(221)。

公立学校における進化論教育の是非をめぐる議論のさなか、こうした記事は近代主義、進歩主義の悪しき影響の象

徴とされ、複数の宗派からの攻撃を受けることになる。UNC学長に対する公式の抗議状、各種宗教雑誌における反論、さらには地元的一般紙までが教会側を支持して、ついにはバプティスト教会が州政府にUNCへの予算削減の請願を出すに至る。この騒ぎはオーダムが知事に対して直接弁明書を書いてはまだ収まらず、翌年にまで持ち越すものの、キリスト教諸宗派の足並みがそろわないことでなし崩し的に収束し、オーダム自身はむしろリベラルとしての評価を高める結果になる (Brazil 436-454)。

ファンダメンタリストとバーンズは宗教か科学かという論争をしながらも、実はアングロ＝サクソンの優越を前提にして、しかもその男らしさを領有／再領有をめぐる争う姿勢においては同じであることは、双方がスタンリー・ホールと人種の理論を援用することで明らかである。バーンズもバーナードも北部の社会学者として南部の雑誌に書いたのだが、同じく、北部社会学者から見た場合、南部はどのように描かれるのか、もう少し広範に人の目に触れた例としてフランク・タネンバウムの『南部の暗黒面 (Darker Phases of the South)』(一九二四)を見てみたい。もともとは一九二三年、三度にわけて『センチュリー』に掲載したエッセイをまとめたこの本はKKK、綿紡績工場、刑務所、単作農業についての南部の状況をレポートしたものである。前書きによればデータの提供はオーダム、またKKKの文章について目を通しているのがバーンズということで『ソーシャル・フォーシズ』とある程度視点を共有していると思われるが、掲載した媒体は全国区の雑誌なので、オーダムの雑誌のように局地的な戦いになるよりはむしろ南部の像を全国に提示する力が大きかったと思われる。

タネンバウムは、第二期KKK——グリフィスの映画『国民の創生 (The Birth of a Nation)』(一九一五)に触発されたウィリアム・シモンズが再結成して以来目覚ましく復活し、反黑人、反カトリック、反移民、反ユダヤ人、要するにアングロ＝サクソン至上主義をして「アメリカニズム」であると唱える——も暗黒面のひとつとして取り上

げる。タネンバウムが『センチュリー』にこのレポートを出した翌年（タネンバウムがレポートを単行本にして出版した年でもある）には、民主党全国大会の期間中、四万人のメンバーがワシントンDCを行進してリベラル派候補アル・スミスへの不支持を表明し、政治的な力を見せつけることになるこの団体は、この時期単なる狂信的な一部の人間の秘密結社というレベルを超え、一〇万人を超えるメンバーを抱えるロビー団体とも化しており（Berlet and Lyons 97; Maclearn xi-xiii）、タネンバウムがレポート対象にすべき力を備えていたのである。タネンバウムはKKKを変化する時代にあつて自分の優位を失うことへの恐怖がもたらしたヒステリックな反応のもたらしたものであると位置づけ、メンバーは「感情的に幼児の状態」（27）にあり、それは「狂気」（29）であると述べる。こうしたKKKによる黒人男性へのリンチについては白人男性の自らの黒人女性に対する性的な態度の一種の代償として黒人男性のセクシュアリティへの恐怖が作動していると指摘したうえで、南部の男性にとってセクシュアリティは過敏にならざるを得ない問題である、と南部一般の問題に広げてみせる（32-33）。感情面に対する見立てと合わせてみるならば、南部の白人男性が大人としてセクシュアリティをコントロールできていない、という含みもそこからは読み取れる。

タネンバウムにとっては、KKKの問題はすなわちアングロ・サクソンの「幼児化」の問題として理解されているわけだが、その視点は綿の紡織工場（町）をめぐる問題を扱った章においても同様である。基本的に低賃金で紡織工場で働く人口がアングロ・サクソン系であると指摘しつつ、タネンバウムは、巧妙な低賃金体系や、それを隠蔽するような一見福利厚生と思えるような住宅、教育政策ゆえにいったん紡織工場のコミュニティにはいったら最後、一家そろって一生そこを抜け出すことができないシステムを批判する。その結果としてモラルに欠け、知的ではなく、儉約の精神も学ばず、社会的に「劣化・墮落（degradation）」（49）しつつある。

タネンバウムはこうした状況を引き起こす結果をまたしてもアングロ＝サクソンの幼児化と位置づける。しかも、彼らは「独立戦争の子孫たち」であるにもかかわらず、「子どもっぽい不能状態 (impotence)」に置かれて、有能な人々を生み出すことができないでいる (55—56)。さらに彼らが喪失しているのは「冒険に向かい」「新たな世界に立ち向かう」性質だ (67) というのだが、これらがアメリカ的な進取の精神であることは言うまでもない。こうした議論から最終的にタネンバウムが南部に対して提示するのは、「高潔さ」と「自己信頼」、そして「男らしさ (manhood)」を喪失した「力無く無能な (helpless and impotence)」(183) アングロ＝サクソン人の姿、つまり正しいアメリカ人の血を引きながらも成長が阻害された南部男性の停滞した姿のイメージである。タネンバウムはネイティヴィズムの優生学によって導き出されるアングロ＝サクソン人の力や優秀さを男性性と結びつけて語り、南部(人)を退化した白人男性と位置づけているのである。

こうした脱男性化、あるいは男性性欠如のイメージに対して、アングロ＝サクソン優越主義で知られるKKKの語る言葉もまたある部分を共有している。KKKはそのアフリカ系アメリカ人に対するリンチが有名だが、そもそもプロテスタントのアングロ＝サクソン優越のネイティヴィズムを唱える限りにおいては、反カトリック、反ユダヤ人、反移民という姿勢においても強力である。だから反インテリ、反カトリック、反コスモポリタニズムのファンダメンタリズムとは、南部こそがその他宗教に汚染されていないアングロ＝サクソンがアメリカニズムを擁護する場所であるとするネイティヴィズムにおいて通底していた (Tindall 283)。

一九二六年、KKKの「大魔法使い (Imperial Wizard)」に就く「皇帝 (Emperor)」ハイラム・ウェズリー・エヴァンズが、『ノース・アメリカン・レビュー (North American Review)』に寄せた「アメリカニズムを擁護するクランの戦い (The Klan's Fight for Americanism)」は、次号と合わせてKKKとその位置を考察する特集の一環

である。次号にはこれに対するレスポンスとして全米有色人種地位向上協会 (N A A C P) 代表として W・E・B・デュボイスほか、その他カトリック、ユダヤ教の権威からの寄稿が予定されていた。この雑誌の権威からすればエヴァンズの論は、南部において実際にクランのメンバーが行っている過激さは差し引かれてはいるものの、じゅうぶん

に公式見解として見て差し支えない。

エヴァンズはラディカリズム (プログレッシブなりベラルを指す)、コスモポリタニズム、外国人への寛容に対して明瞭に異議申し立てをし、アメリカを創ったのは最初から「北歐人種 (Nordic race)」たる「古くからのアメリカ人 (old-stock Americans)」(6) であると述べる。ここで言う北欧系はアングロ＝サクソン (イングランド人)、オランダ人、ドイツ人、ユグノーの人々、アイルランド人とスコットランド人 (ただしこのアイルランド人はプロテスタントのアイルランド人、いわゆる開拓時代にすでにアメリカに移民していたスコッチ＝アイリッシュを指すと思われる) である (20)。エヴァンズはいわゆるアメリカ的な性質をその人種の性質に求め、クランのスローガン「アメリカ生まれ、白人、プロテスタントの優越 (Native, white, Protestant supremacy)」(20) を表明してはばかりではない。彼がアングロ＝サクソンをアメリカ (人) と等式で結ぶときに使用する形容詞はそのまま一九世紀末以来のネイティヴィズム、たとえばジョサイア・ストロンクの『我が祖国 (Our Country)』(一八八五) を彷彿とさせる。ストロンクはアングロ＝サクソンこそ比類なきエネルギー、富の力、「最高の自由、純粋なキリスト教、最高度の文明 (the largest liberty, the purest Christianity, the highest civilization)」を持ち、その「攻撃的な性質 (aggressive traits)」により、他の者の上にたつべき人種であるとして (175)、アメリカの帝国主義的拡張をネイティヴィズムから裏支えしたが、一方エヴァンズもまたアメリカを創るのみならず「近代的な文明」を作ったのは北欧系であると言っぱかりか (6)、さらにはプリマスロック以来のアメリカニズムの根幹をなすプロテスタントの精神、

独立、自由、自己信頼といったアメリカの伝統と北欧系に対する忠実さこそが北欧系の人間の持つ本能として遺伝していると言いきっている(20, 22)。このような発想は、南部に特化される異端のものというよりはむしろ支配的なネイティヴィズムの系譜に連なるものである。実際エヴァンズは当時のネイティヴィズムの理論的先鋒であったロスロップ、ストダードのベストセラー『白人優越主義を脅かす有色人種の波』(The Rising Tide of Color against White World-Supremacy)』(一九二〇)を論拠としているのだが、その際ストダードが自身の本に先行するマディスン・グラントの『偉大なる人種の死滅』(1916)に依拠して、「優越する遺伝の切迫した衝動(imperious urge of superior heredity)」に立ち戻るべし(Stoddard 168-169)という部分を引き合いに出して²⁶ (Evans 4) のである。

民主主義のアメリカがプロテスタントの北欧系人種の持つ「本能的な理解 (instinctive racial understanding)」(21) とその人種の血を「純粋に」(20) に保つことによって創られるというエヴァンズのロジックでいえば、異教徒や移民はたとえアメリカにやってくるまでもその痕跡は「豹の紋様 (spot on a leopard)」(これはトマス・ディクスン・ジュニアのKKK三部作の中の *The Leopard's Spots: A Romance of the White Man's Burden 1865-1900* (一九〇二) を思わせる) が消えないことと同じであって、北欧系の血と純粋なキリスト教を汚すもの、すなわちアメリカを弱体化するものとして退けられなければならないのは当然のこととなる。そこから、国内にすでに入り込んで「繁殖力 (mere force of breeding)」(11) が北欧系をしのぐ移民、カトリック、ユダヤ人を「根絶やしにする (weed them out)」ことも必要だとされる。北欧系プロテスタントの血の純粋さをこそアメリカとする定義に基づいたエヴァンズが北欧系とその子孫の優越と移民を語る言葉は優生学や社会進化論の色が濃く、血による決定論の様相をも帯びている。

また、一九世紀のポピュリズムのように農民や職人などの「旧くからいる人種の普通の人たち」にアメリカニズムの救世主の役割を担うよう叫ぶとき、知識人やリベラルなどのエリート層が「雑種化した (mongrelized)」(6)「外国人の精神 (alien-minded)」を持った「侵入者 (invader)」(2) であると形容されなければならないことも、彼らの図式からすれば自然の帰結である。「アメリカで生まれ育つこと」、言い換えれば移民として外部から入ってくることを排除するネイティヴィストのKKKが駆逐対象とするのは、まずもって「外国のもの」だが、それがリベラリズムと結びつけられていくのである。だからリベラリズムにもまた移民に対するのと同じ形容が、すなわち人々を「退化させ (degenerate)」、「汚す (viliate)」、「虚弱 (weaking)」と「不適合 (unfit)」という表現が適用されることになる (10-11)。

さらに、KKKの理屈のなかでは、その代々の優越性の継承や、同時代のアメリカ人の団結がどうやら男同士のつながりとして、アングロ＝サクソンはなにやらマスキュリンな形容詞で語られる存在にもなっていく。KKKには五〇万人を数える女性会員がいたにもかかわらず (Blee 101-114) 彼らの団結は「白人アメリカ人の兄弟の絆 (brotherhood among white Americans)」(Evans 3) に基づくものと位置づけられ、KKKメンバーの力はそのまま男性性の発露として表象される。エヴァンズによれば、継承された資質はある世代の男たちに受け継がれたが、自分たちの一世代前の北欧系は移民流入や南北戦争のおかげで居心地が悪くなり、「彼」は今や「父がもたらした土地で異質な存在」となっている (6-7)。こうした中でKKKが「活力溢れる本能 (vital instincts)」(17) を表現し、「闘争的かつ建設的 (militant, constructive)」(17) な行動にうつって出るとき、それは移民の「侵入」(2) を退ける「あらたな戦い」(9) にはかならず、またその戦いはまさしく彼ら北欧系の「活力 (vitality, vigor)」(19, 18) と「駆動力 (driving power)」(19) に基づくものと理解される。

KKKを擁護するエヴァンズも、それを批判するタネンバウムも男性性をめぐる語彙について共通している。KKKを「恐れに基づく防衛的な運動だ」(9)というタネンバウムに代表されるような意見に対して、エヴァンズはむしろ男性的なヴァイタリティや原動力を対置して「戦って勝つ」という積極的なマスキュリティのイメージを打ち出しているのである。キメルによれば、一九二〇年代には、一九二四年の移民法をめぐる議論も手伝って人種差別とネイティヴィズムの議論はしばしば筋肉キリスト教のマスキュリンな語彙を受け継ぎ、他者(外国人)を男らしさにおいて劣るものとするジェンダー化された言説を構築していたが(191-97)、タネンバウムもKKKと同じ背景を共有して男性性の収奪をめぐる戦いを繰り広げているのである。少なくとも一九二〇年代の南部批判にまといつくジェンダー性は、こうした背景において生じていると言えるだろう。

KKKと男性性については、たとえばアフリカ系アメリカ人に対するリンチのきっかけが、アフリカ系男性による不適切な行為とされるものであり、しかもそれは共和党への投票や経済力をつけること、あるいは白人女性に対するレイプ疑惑など、その行為が白人市民の男らしさの基準と同等あるいはそれをしのぐような時にそのように解釈されるということについてはすでに言われていることであるが(Messerschmidt)、同時にリベラル知識人による「恐怖に基づく防衛行動」といった解釈もまた彼らの男性性を脅かすものと取られていたと言っているだろう。

このような南部叩きの声のせめぎ合い、あるいは男性性をめぐるせめぎ合いは、一九三〇年代には南部リベラルによる科学的な、あるいはニューディールに賛同する進歩主義による経済学の語彙を用いた語りが公式の場を占める方向に向かって収束していく。先に取り上げたハワード・オードラムが一九三六年に出した大著『アメリカの南部(Southern Regions of the United States)』のその翌年にオードラムの本のデータを下敷きに彼と親しこリベラル系ジャーナリストのジェラルド・ジョーンソンが簡潔にとりまとめた『浪費された土地(The Wasted Land)』がその道筋

をつけた。F・D・ローズヴェルト大統領の「南部はいまや我が国の経済問題ナンバーワンである。これはひとり南部の問題ではなく、国家の問題である」という手紙（実際大統領執筆ということになっている手紙もまた南部のリベラル系のメンバーの文案である）によって招集された「南部の経済状態に関する会議」によるレポート（一九三八）は「南部は遅れている」という「行き暮れ」言説の頂点となるが、これはオーダムとジョンソンを下敷きにしたものである。もちろんこのレポート自体は大統領の命令で集まったメンバーによる公式文書であることや、また南部の多くの人に読んでもらいたいとの希望から「経済資源」、「土壌」、「水」等々一五の項目で成り立つ各章ことを薄いパンフレットにして配布しようとしたその目的があったために、文章は何度も推敲され激越さがないように配慮されていた（Carlton and Coelaniis 1-32）。また、ニューディール期の特徴として、二〇年代と違って人種の語彙ではなく経済の語彙で南部の荒廃を語っているために、そこにあるのはいかに南部の豊かな資源が何も生み出さないことになっているか、という不毛のイメージのみである。

＊南部の男性性

一九二〇年代における南部の現状をめぐる言説の強力な発信源は、先にも見たとおり、ファンダメンタリズムやKKKの側と、それに対する南部や北部のリベラル派のジャーナリストや学者のあいだでの応酬である。こうした応酬は第一義的には科学、近代主義、コスモポリタニズムなどの是非を巡るものであったも、先に述べたとおり、そこにはアングロ・サクソン（北欧人種）を支配的な人種とした場合の人種の活力や優秀さが男らしさと直結したものとして描出されている。一九二〇年代南部の行き暮れた状況については、先に挙げたティンドールや、フレッド・ホブソン、ダニエル・シングルの記述（Hobson 180-213; Singal）があるが、しかしそうした言説がジェンダー化されて

いる点については奇妙にも注目されてはいない。

こうした点について、南北戦争後から一九〇〇年までに限定されてはいるものの、ニーナ・シルバーによる南部をめぐる言説や表象に潜むジェンダー性に注目した歴史研究『再統一のロマンス』（一九九三）は示唆に富む。シルバーは、基本的には南部が北部の言説のなかでどのようにジェンダー化された表象を与えられてきたかという点について、文学作品にとどまらず、新聞、雑誌、さらにはそうした媒体に掲載された画像も含めて広範な分析を行っているが、そこから浮かび上がるのは、言説としての南部は、南部北部の相互干渉の中で構築されるということ、またその際、社会や政治の制度をめぐる南北の差異がジェンダー化した修辭へ変換されていたということである。

シルバーによれば、南北戦争後の南部は、南部連合大統領ジェファソン・デイヴィスが「女装して」逃走を企てるも失敗した場面の図像に示されるように、「女々しい男」と、男を戦争に駆り立てる女らしくない女の住まう土地とされる。その後再建期の混乱で南部白人が苦境に立ち、また、北部が産業化の不安を抱えはじめると、南部はドメスティックかつノスタルジックな場と見なされるようになる（13-97）。ガースターとコースはいわゆる南部のプランテーション文学が「アメリカの神話的想像」に基づくと述べているが（567-82）、プランテーションのイメージはこうした文脈の中に置くことができる。また、このようなプランテーションのイメージは北部のツーリズムをも呼び込み、南部プランテーション・ツアーなどが売り出された（Silber 78-79）。もちろん、こうした表象は一方的に北部から付与されたままになっていたわけではなく、南部の側も利用しており、南部のリベラル派ヘンリー・グレイディは一八八〇年代にニュー・サウスの運動を進める際に、南部の封建的秩序が北部の労働争議にも有効であるという論法を使っている（Gaston 167-180）。

以上のように南部に女性性を付与する表象の創られ方を見ると、南部の女性性とは北部の北部白人男性の不安が書

き込まれたものとも言えるだろう。というのも、拡張主義前夜になり、産業化による過度の文明化がアングロ＝サクソンの弱体化を招くという不安が、大量に押し寄せる移民への不安やニュー・ウーマンの登場によるジェンダー規範の不安と重なったとき (Kimmel 157-188)、南部は北部の側から「男らしさ」を付与され、南部の側もアングロ＝サクソンの国としてアメリカにおける正当性を訴え、男らしさをみずから提示することが可能になるからである。一八九〇年代には、北部の男性が抱える上記のような不安はさまざまな形で表出する。それは例えば、アングロ＝サクソンの活力が自明なものとされた中世騎士道への憧れであり、その憧れは騎士道精神を報ずる南部男性の男らしさの礼賛にも向かった。アングロ＝サクソン人種の弱体化を憂える北部は、南部男性の活力を取り込み、南北の和解を介して南部を国家に再度組み込むことによって一枚岩的な共和国のイメージを作りだそうとする。その発想を典型的に表すのが、一八九八年の米西戦争の際に流通した「南北男性の団結」のイメージだが、それはアングロ＝サクソンの男性の絆として表象される。その代表的な図像が当時のタブロー「小さなキューバ」を守る南軍と北軍の退役軍人の写真である。そこではそれぞれの軍服を着た白人男性が握手をし、その握手の背後で守られる弱きキューバは幼い白人の少女として表象される (Silber 159-181)。

しかし、こうした北部男性と南部男性の和解の図には植民地、ジェンダー、人種のサブテキストが組み込まれている。白人男性の握手は植民地、あるいは女を弱き者として保護下に組み込み、さらには人種の問題を不可視化する。そして、この図式にこのような意味を読み込むことがあながち的はずれでもないことは、南部の男を描いて当時人気を博した文学作品オーウェン・ウィスターの『ヴァージニアの男 (The Virginian)』(一九〇二)、トマス・ディクソン・ジュニアのKKK三部作のうち、とりわけ『クランスマン (The Clansman)』(一九〇五)、あるいはそれが映画化された『国民の創生』も同じ構図で読み解きうることからわかる。

西部劇の元祖ともいえるウイスターの作品は、騎士道精神を備えたヴァージニア生まれの男が西部でカウボーイとしてその統率力を見せ、名誉のために仇敵との決闘に勝利をおさめる過程をとおして一人前の男に成長し、最後には東部からやってきた名門の女性モリーと結ばれる物語である。その中で東部から神経衰弱の治療にやってきた語り手「わたし」との間に育つ男同士の友情は、いつてみれば西部と東部の握手であると同時に、その実それは当時の国体統一のイメージをも伝える南部の男（ヴァージニアの男）と北部の男（ニュー・イングランドの「わたし」）の握手とも言える。男女のロマンスもまた南部の男と北部の女のロマンスと読める。とはいえ、それは、女性化していると言えるような東部の男性が西部で活力を取り戻し、ヴァージニアの男と対等な友人——握手をできる関係——となり、同時にヴァージニア男の恋人モリーがそれまでの強気な立場を棄てて「飼い慣らされない男」を「主人」(Wister 292)とあがめるようになる過程と表裏一体、同時生起的な図式である。その意味では南北の男のホモソーシャルな握手は不安定なジェンダー規範を再配置し、また人種の問題も見えなくするものである(越智二〇〇四)。

ヴァージニアは最も古い英国植民地であり、また、ワシントン、ジェファソンなどの建国の父祖、さらには典型的な南部騎士として神格化されていたリー將軍を輩出した土地でもある。そのため共和国に再度組み込む場合、最も正しくアングロ・サクソンのアメリカの伝統を受け継ぐ土地となる。だから、南軍兵士を父に持つエドガー・ライス・バロウズが一九一二年に世に出した『火星のプリンセス (A Princess of Mars)』において、地球から火星に飛んだヒーロー、ジョン・カーターがヴァージニア紳士であるという設定はこの系譜を仮定して初めて説明できる。南北戦争に敗れた南軍兵士のカーターはある日突然何ひとつ身にまともぬ姿で火星に降りたってしまうのだが、獅子奮迅の活躍を見せ、様々な色の火星人を統べる「白い騎士」として、文字どおり裸一貫から火星世界の頂点へと上り詰めていくセルフ・メイド・マンである。この物語で強調されるのは、火星に行くのはアメリカ人というよりはむしろヴァ

ージニア紳士であるという点だ。カーターは火星という異世界で姫君に求婚する際、「この身体に流れる勇猛なヴァージニア人の血にかけて」(116)と誓い、語り手もまた「こうして……王女デジャー・ソリスはヴァージニア紳士ジョン・カーターと結婚の約束をした」(134)と描写し、カーターが「ヴァージニア紳士」であることが執拗に繰り返されるのである。

こうした描写は騎士道精神に溢れたヴァージニアの強い男を成立させ得る文脈あってこそ成立するもののはずである。実際、カーターの描写はウィスターのヴァージニア人と驚くほど類似点が多い。ウィスターの小説においては、ヴァージニアの男はスレンダーな背の高い若者で「絵よりも美しい」(一三)、「ハンサムで破格な荒野の息子」(一七)であり、その完璧な肉体に騎士道精神を秘めている。一方カーターも、ヴァージニア出身のカウボーイと同じく背が高く、「男らしさのすばらしい見本 (a splendid specimen of manhood)」であり、「礼儀正しい物腰は最高の部類に属する南部紳士のもの」と形容される(一六)。

ウィスターの作品に描かれていた強い南部の男と北部の女のロマンスという図式はそのままマス・ディクソン・ジュニアの『クランズマン』に受け継がれており、南部の男キャメロンが中世趣味を色濃く持つKKKを率いて北部の娘エルシーを黒人の悪漢の手から救出する物語は一種の騎士道英雄譚として成立している。この物語では、キャメロンの男らしさに対して、黒人に対して寛容な北部の共和党の政治家でエルシーの父ストーンマンはしばしば「老人」、あるいは「老いた指導者」、「女なみにお世辞に弱い as susceptible to flattery as a woman」(98)、「要するに男らしさのレベルが下がった人間であり、むしろキャメロンの断固とした態度こそ共和国を救うものとなる。こうした南北の和解——握手——が黒人を抑圧することで成り立つことについては、この映画版『国民の創生』においてこそ露骨に表れている。

映画の冒頭で、「アフリカ人をアメリカに連れてきたことが最初の不和の種を植え付けた」という文字が浮かび出すこの映画は、結局のところ黒人に不和のすべての責を負わせるような作りになっている。しかも、第二部冒頭ではヴァージニア州出身の最後の大統領といえるウッドロー・ウィルソンによる南北戦争後の混乱を語る文章が浮かび上がり、そこでは南北戦争の結果、南部が「黒い南部に踏みつけられて (white South under the heel of the black South)」おり、その自己防衛のためにKKKという「紛れもない南部の帝国」が現れた旨が伝えられる。結局、分をわきまえぬ黒人を倒して訪れる大団円で再び画面に現れるのは「ひとつにして分かつことのできない、自由と団結ここより永久に (Liberty and union, one and inseparable, now and forever)」という文字である。この映画の図式もまた黒人を抑圧し、不可視のものとする南部と北部の握手の図式、つまりアメリカの統一とは白人の一枚岩的な統一の謂いであるという図式を踏襲しているのである。

ヴァージニア出身のウッドロー・ウィルソン (在一九一三—二二) の大統領選勝利は「民主党による南北戦争以来最大の勝利」と讃えられた。グローヴァー・クリーヴランド大統領も民主党だったが、彼は南部の民主党ではなかった。ウィルソンが「戦争後初の南部の民主党」大統領ということになる。彼を支持したのはいわゆるソリッド・サウスと呼ばれる一枚岩的な南部民主党員のみならず、それまでは共和党を支持していたアフリカ系の人々もであった。ウィルソンの「ニュー・フリーダム」というキャッチフレーズはなおいつその有色人種の解放を約束しているように思えたからだ。しかし、生粋の南部民主党員としてアングロ・サクソンの南部を背負った「ヴァージニア紳士」ウィルソンの政権は、それ以前にはアメリカで最も黒人に対して門戸を開いていた連邦政府関連の機関に黒人差別を合法化する南部のジム・クロウの制度を持ち込んで、ワシントンを南部化し、時代を一気に引き戻した感があった。人種の扱い方について問題含みなグリフィスの映画は、ウィルソンにとって、そして当時の最高裁判事で元K

KKのメンバーだったエドワード・ダグラス・ホワイットにとって、「真実」として熱烈に支持すべきものだったのだ。
(Dohrutz and Shanks-Meile 40; Pater 1-45)

先にも述べたように、一九二〇年代の南部叩きについては、従来この時期に南部が集中的な非難を浴びた事態そのものとその内容に関する叙述が主流であった。しかし、そこに潜むジェンダー性を思い起こすならば、南部が特定の時期に非難されたというのみならず、さらに南北戦争以来「アメリカ全体」あるいは「北部」との関係で南部が帯びてきた意味合いという文脈を考えざるを得ないのではないだろうか。一九二〇年代の南部批判は、多数のデマゴーグを擁する南部民主党に対する非難ともあいまって、ウィルソンが最後は卒中の後遺症のために男らしい力強さを文字どおり失って退場すると同時に出てきた感がある。また、同時に南部言説が北部表象との相互干渉で創られたというシルバーの議論を敷衍するならば、KKKが述べていたような移民の流入やアングロ＝サクソンの弱体化といった問題は実のところ北部にとっての焦眉の問題であったという点も鑑みる必要があるだろう。おそらく南部を暗黒として「表象」する、ということには、北部の不安もまた投影されており、問題ある南部とは問題ある北部の鏡像となっている部分もあるからである。南部が叩かれたというばかりではなく、なぜ突如叩かれたのかを問うためには、とりわけ人種や宗教、プロGRESSヴィズム（あるいは近代主義）というその当時の南部叩きのアーリーナで問題となる主題がアメリカ全体の中ではどのように問題化されていたかということとの関係で捉え直すべきだろう。そうした関係性の中で南部においてのみ、南部に対してのみ問題が焦点化されていたこと——もっと正確に言えば、アングロ＝サクソンという人種や男らしさのイメージを使いつつ焦点化して語られたということはおそらく、そうした問題が北部にとっても実は問題であるからこそではないだろうか。

一九二〇年代、そして三〇年代の南部批判は最終的には南部をニューデール政策の言説空間の中で「アメリカ全

体のやっかいなお荷物」として取り込む論調を取った。南部とは、先に挙げた「南部の経済状態に関する会議」の立場としては、とりもなおさず「アメリカのナンバー・ワンの経済問題」(Carlton and Cocharis 42)として、すなわちひとり南部にとどまらぬ国家の問題として組み込まれていくのである。たとえば二〇年代のタネンバウムが南部では北部と同じアングロ・サクソン人の子孫たちが発展から取り残されて退化の途にあることを南北の二項対立の図式に照らして憂えていたことからすれば、三〇年代の「会議」にとっては、南部は南北の対立において捉えられるよりもむしろアメリカが抱え込んだ出来ない子孫、アメリカのできのわるい息子のようなものだった。

II 正しい伝統の創造

モダニストとしての『フュージティヴ』詩人から保守反動的ともいえる農本主義者になったランサム、テイト、デヴィッドソン、ウォレンは、そこに若いブルックスを加えたかたちで南部ルネッサンスをアメリカ文学の正典にすえ、新批評を制度化する。この「モダニズム詩人」農本主義「新批評」の結びつきと変転は、ただし、それほど矛盾に満ちたものではない。そもそも「逃亡者」を意味する『フュージティヴ』の詩人としての彼らは雑誌創刊号の巻頭で「旧南部の上流エリート」、あるいはそうしたものが象徴するセンチメンタルな文学慣習から逃げ、むしろT・S・エリオットの言うような「伝統」を継承するものとしてのモダニズムであったからである(越智二〇〇二)。

ジョン・R・ハリスンの指摘するように、「反動主義者」としてのエリオットは「有機的社会」を崩壊させる産業主義を嫌い、むしろ農本主義社会の固定した規則や習慣がまとう権威こそが自由を支え、またそうした社会でしか文化は育たないとする。この時文化の担い手は少数のエリートが支えるものとして構想されている。(Harrison 145-

(60) フュージティヴから農本主義への道は、このように考えると、旧南部ではないが、しかし産業化されていない農本主義社会のイメージを共通の基盤に据えながら詩作『フュージティヴ』、あるいは政治的マニフェスト『私の立場』へとその表現を変えていくものと理解できる(越智二〇〇一)。

お上品な旧南部そのものではないが、産業化以前の南部としてイメージされる南部。それは確かにマイケル・クレイリングの言うとおり「アイコン」(99-107)としての南部ではないかもしれない。しかし、そうした南部を想定したうえでの「敗北して初めて堅固な南部が生まれた」(Warren, 1998 14-15)というロバート・ペン・ウォレンの言葉や、はたまた「現在の中にある過去を意識する文学」(Tate, 1945 545)を南部ルネッサンスであるとするとテイトの言葉を前にして、そのようなアイコンをアイコンであるというばかりではなく、何をその中に込め、何が表象されていないか、という点から再考してみる必要があるのではないだろうか。というのも、このアイコンは確かにアイコンである以上、非歴史的な性質を担わされた構築物でしかないしろ、それが構築される過程には一九二〇年代の南部叩き言説があったのであり、従って構築行為それ自体はきわめて歴史的な振る舞いであり、またそうしたものとしての「非歴史的アイコン」それ自体は歴史的な産物だからである。

本章では彼らの構築した、あるいは想像した歴史が南部叩き言説への応答であるという視点から、いまいちど彼らが「忠実」であった「改変」された歴史の生成を、農本主義運動と新批評の男性性、およびテイト、デイヴィッドソン、ウォレンらによる大量の父親的人物像の意味、あるいはそうしたものを大量に生み出すことそのものの意味を問い返してみたい。たとえそれがポール・マーフィの言うように改変・忠実がひとつのパラドクスとして農本主義者の分裂と、そのラディカルな保守主義の切っ先を鈍らせるものであるとしても(6)、その中で彼らが「同胞」として共有していた部分があり、また、その保守主義が最終的には新批評が冷戦時代の言説と親和する性質を持ち、アメリカ

リズムと共振していく部分ではないかと思われるからである。

*父の群れと南部の再男性化

フュージティヴ詩人が農本主義者になるとき。それはアメリカ南部をイングランドと直結し、文化の源を北部のマサチューセッツやコネチカットと切り離す行為だったのではないか。コンフォर्टイが明らかにしたように、ニュー・イングランドという土地もまたアメリカの文化を担う中心地として「歴史に根ざしつつも文化的に構築されたものである」⁽⁹⁾からだ。してみると、南部叩きは南部ではない北部を構築するひとつの方法として機能していた部分もあるだろう。南部が叩かれれば叩かれるほど、北部が抱える問題は隠蔽され、北部の文化イメージは安泰となる。

南部を問題化して有徴の存在とすることが北部を無徴のノーマルな存在にする。事実、第一次大戦前後には、KKKやファンダメンタリストが問題化するような移民の問題や産業化の問題は、むしろニュー・イングランドで顕在化しており、また中西部が古い東部から「アメリカの中のアメリカ」というイメージを収奪しはじめていた。それに応答してニュー・イングランドには「旧南部」顔負けの「旧ニュー・イングランド (Old New England)」言説が構築されていくのだが、その過程におそらく南部叩き言説が機能していた。たとえば、こうした旧ニュー・イングランド言説が言及しないものが実はニュー・イングランドにおいて活発だったKKKである (Conforti 203-309)。しかし、そうした問題はもちろん南部で色濃かったとはいえ、あたかも南部に「特有」のものであるかのように語られていた別の言い方をすれば、問題を南部に投影することにより、ニュー・イングランド、あるいは旧ニュー・イングランドはそうした問題を免れた地として言説上構築することが可能になるのである。それを考えるならば、南部叩き言説は北部もまた抱えている問題に対する不安を集約したものだと言えるだろう。そして、先の章でも見たように、問題を

抱えたものとしての南部を語る言葉に男らしさの比喩と語彙を持ち込んで、それをノーマルから滑り落ちたひ弱さと位置づけ脱男性化した存在として語るとき、それに対抗する南部の側からの語り直しが同じく男らしさの復権のごとくなるのは理屈のうえでは無理なからぬ帰結である。

この文脈で注目したいのは、フュージティヴ詩人たちが、農本主義者としてみずからの南部性を前面に押し出すそのときに、文学作品の中では歴史を意識し、父親像、とりわけ南部の父祖的な人物像を大量に世に出したことである。テイトは小説『父たち (Fathers)』、『南部連合戦死者に寄せるオード (Ode to the Confederate Dead)』、あるいはロバート・E・リーなど南軍の将軍、大統領の伝記を、ドナルド・デイヴィッドソンもまたテネシーの父祖をめぐる詩集『そびえ立つ男たち (Tall Men)』や『山岳地帯のリー将軍 (Lee in the Mountains and Other Poems)』ほか、テネシー州の歴史書を出している。ロバート・ペン・ウォレンの『ジョン・ブラウン伝 (John Brown)』は北部の英雄のラディカルな書き換えである。また、『すべての王の臣をもつてしても (All the King's Men)』も含め、ウォレンの小説はしばしば掟としての父の正当性やその権威をめぐるものである。

まず、非常にわかりやすい「父祖」像としては、南軍兵士たちを再表象し、復活させる一連の作品がある。これに関しては、アレン・テイトの「南部連合戦死者に寄せるオード」(一九二八)が有名ではあるが、テイトはこの時期続けざまに『ストーンウォール・ジャクソン伝 (Stonewall Jackson: the Good Soldier)』(一九二八)、『ジェファソン・デイヴィス伝 (Jefferson Davis: His Rise and Fall)』(一九二九)、『ロバート・E・リー伝 (Robert E. Lee)』(一九三二)を出している。ストーンウォール・ジャクソンやリーはテイトが書かずとも十分に南部で英雄視され、「男らしい」南部連合の指揮官であったヴァージニア紳士だが、おそらくこの三作で注目すべきは「女装して逃げた」ために脱男性化どころか女性性さえ被せられていた、その意味では女性化される南部の象徴ともいえるジェ

ファソン・デイヴィスの伝記である。

テイト版のデイヴィス伝の意図は、デイヴィスの男らしさの回復である。ジェファソン・デイヴィス（一八〇八一八八九）は南部連合の大統領として南北戦争を戦い、負けた。そして、彼が北軍の手に落ちたときに「女装していた」ことは、戦後「女々しい南部」を語るときに引き合いに出される「定番」であった（Silber 13-38）。ところがテイトはそのデイヴィス表象を、再男性化して南部の側からの語りの中へ取り戻すのである。

テイトの記述によれば、デイヴィスは「騎士道的な戦争」（293）の信奉者として「ドン・キホーテさながらの誇り」（293）をもって戦争を戦った。最後、敵に捕らえられたときには、彼は「防水コート」を羽織っており、さらに妻が夜明けの露をしのぐためとしてかけてくれたショールを羽織っていた。しかし、テイトは、コートとショールそれだけで、と言いたげである。というのも、次には略奪好きな北軍兵士が妻のトランクをかき回して新しいクリノリンを見つけた、と記述されるのみであり、そこから読者が想像するのは、おそらく北軍兵士がデイヴィスを女装「させた」であろうという状況だからである。

ジェファソン・デイヴィスは捕まったとき姿を偽って逃げようと妻のクリノリンを身につけていたと言われている。当時何万人もの人がそれを信じたし、今でも信じている人がいるのは疑いない。（298）

こう述べることでテイトは女装伝説を否定し、むしろデイヴィスを、騎士道精神（275, 293）を体现する男として再表象する。

父祖の再表象は、北部の父祖的表象の書き換えにも及んでいる。ウォレンの『ジョン・ブラウン伝（John

Brown)』(一九二九)は、ウォレンが出した最初の本であり、ローズ奨学金でオックスフォードに滞在しているあいだに書き上げられた。ジョン・ブラウン(一八〇〇—一八五八)はコネチカット出身の奴隷制反対の活動家で、ヴァージニア州のハーパーズ・フェリーで連邦の弾薬庫を襲って捕まり処刑されるが、奴隷制廃止のために雄々しく戦った北部の英雄として記憶された。彼の亡骸を歌った「ジョン・ブラウンの亡骸」のメロディーにジュリア・ウォード・ハウが愛国的な詩をつけたものが「リパブリック賛歌」になったことは有名である。

ウォレンが行ったのは、副題「殉教者の創造(The Making of a Martyr)」にも示されるとおり、エマソンやソーローまでも味方につけたブラウンの殉教者としての位置が「つくられた」ものであることをあばく脱神話化の作業である。ブラウンは相応に狂信的な信仰の持ち主であるとともに、そもそも「勇名」をはせたカンザスへの旅立ちにしても「何か自分に利すること」(106)を探しに行ったのであって、奴隷制云々の問題ではなかった。ブラウンの大量の手紙からウォレンが読み取るのは、局面ごとに「新しい自」像の概略を作る」(430)「自」中心的な性質」(350)で、最終的にハーパーズ・フェリーでの襲撃事件の責を負って処刑を目前にしたとき自らを「殉教者」(430)と認めることで、そうした風情を手紙に滲ませたというのである。

しかし、ブラウンを殉教者にまつり上げたのはひとりブラウンの思いこみによるものではない。ウォレンによれば、そうした彼のことを、たとえばエマソンが「殉教者」(431)として語ることによって創られていくのである。カンザスで奴隷制擁護者を殺したときに馬や武器を盗んだ犯罪行為は忘れ去られ、「追悼記念行事(commemoration)」(432)で語られることばかりが後世に残る。また、奴隷解放宣言によってジョン・ブラウン自身のみならず、また彼についてエマソンその他が言ったこともまた明瞭な輪郭を定められて「神聖なもの(enshrined)」(432)となる。最終的には、そうした過程をつうじてブラウンはひとつの「象徴」(432)になったのだ、というのがウォレンによる

ジョン・ブラウン神話の捏造過程の解釈である。トマス・ディクスン・ジュニアは『豹の文様』の中でストウ夫人の『アンクル・トムの小屋』の登場人物を使って、むしろアンクル・トムの立場にあるのは南北戦争後の白人であるとして奴隷解放後の悪夢を描き、ストウ夫人のメッセージをラディカルに転覆させたが、ウォレンの『ジョン・ブラウン伝』もまたディクスンの書き換えに匹敵する書き換えとして機能しうる。

このような歴史の書き換えをつうじて行われる南部の名誉回復は、とりもなおさず南部の再男性化であると言つてよいだろう。ドナルド・デイヴィッドソンの「そびえ立つ男たち (Tall Men)」では、テネシーの父祖がどこまでもファリックな存在として描き出されていく。この詩は一九二七年に出された同名の連作詩集の巻頭を飾っている。語り手「わたし」は通勤ラッシュにもまれる一九二〇年代の勤め人。彼が思うのはその昔、テネシーを創った男たちのことである。テネシーにやってきてチェロキーを駆逐した背の高い男たちは、「弾丸」を言葉の代わりに「ライフル」から語る(66)。ビジネス仲間の北部の男は弾丸の代わりに言葉をを使うような「小さな」男だが、その相手をする語り手とて、残っているのは背の高さと誇りばかりで「柔弱 (soft)」な身体を路面電車に運んでもらうばかりだ(67)。北部から来た男は、「わたし」の背の高い体格は田舎ならではの食事をしてきれいな空気を吸いつつアップダウンの激しいところを歩いているからなのかと、まるで「田舎者」だから体格がよいとも言いたげな質問をする。すると「わたし」は、それは田舎生活ではなく「人の種 (the seed of man)」(67)にあるのだ、と返す。ライフルで語り、背が高い男。この露骨にもファリックなイメージは、そのまま祖先の時代からある「巨木」にも受け継がれる。その木は今も町に残り、この世の深いところ、この世とテネシーが不可分に結びついていた時代の地層に根を張り、「たくましい幹を張り切らせている (bulging its muscular trunk)」(71)。

このどこまでもファリックな、男性性に満ちた「人の種」は——「私を母に宿させた腰 (joins that begot me)」

(67) の持ち主は——どこから来たのだろうか。この詩の語り手はテネシー州の歴史に名を残す英雄の勇姿を描く。たとえばその父祖のひとり、独立戦争の英雄で初代テネシー総督ジョン・ザヴィエの「父祖」はイングランドから来た。また、チェロキーと戦ったブキャナン少佐と部下のマックローリーにしても、その名を見ればアングロ＝サクソン、あるいはやはりWASPに分類できるスコッチ＝アイリッシュ系の名前である。しかも、ザヴィエの父祖は「種」が実は「種」でもあったことを感じさせる男親・種馬を表す“sires” (71) という語で表されている。

ザヴィエ、マックローリー、さらにはアンドリュー・ジャクソン、デイヴィー・クロケットとテネシーの英雄が憑依したかのように彼らに成り代わって語る語り手にとって、そうした「我らが人種」(73)の人物たちは「騎士道」(71)を身につけた「闘士」(73)だった。その血は今でも語り手の「身のうちに反抗的にたぎっている (the blood running rebelliously within me)」のに、語り手はもはや英雄たちの時代とは遠く隔たった時代において、そうした武勇の場に参加することができない。彼らの声は今や「幽霊」(74)としてその骨が眠るテネシーの大地に吹き飛ばされるのみである。ラングドン・ハマーの述べるとおり、この連作詩は「人種の力をめぐる粗暴なファンタジー」(82-83)であり、二〇世紀半ばのネイティヴィストの発想と立場をひとつにするものである。

ここに、同時期に書かれながらもほぼ一〇年後にようやく出版される (Bradbury 99)『丘陵地帯のリー (Lee in the Mountains)』(一九三八)に収められた「丘陵地帯のリー」と「アポマトックスその後 (Sequel of Appomattox)」を読み合わせてみれば、その含意は明らかのように思われる。まず「アポマトックス」の方は、リー将軍が降服した場所アポマトックス(これが南軍の降服の時点とされている)が呼び込んだ景色として「騎士の幽霊 (phantom cavalry)」の白い影が語られる茫漠とした詩である。明言はされていないが、夜中に集いあう「白い」馬上の人々、墓から「思い出せ。私はお前の主人だった、お前は私の奴隷だった」(43)と語る白い死者の群れと形容され

る人々の馬上の姿は(88)、おそらくKKKによる夜討ちの光景である。そして「丘陵地帯のリー」は、アポマトックス以降のリー將軍、いや、今や市井の人リー氏となったロバート・E・リーの意識を語る一編である。敗北を語り得ないリーが唯一語り得る、改訂を施し得るのは独立戦争の英雄でもあった亡き父の回想録であり、父親世代は今や失われた「騎士」となっている。

自分の経験など言葉にしたいくないと願うリーにとっては、父こそ「聖なる大義」のために戦った人物として記憶されてしかるべきであり(47)、リーたちの世代はむしろ子孫たちに父の世代の「失われ、なくしてしまった武勇」、そして「死滅することのない激しい信念」(5)が復活することを願うのみである。このような過去の父祖の活力と男らしさを結びつけ、今の無力感を寂寞とした感慨とともに語りつつも、強い父を語ることが効果として持つのは、強さの潜在力は息子にもあるであろうことである。読者はリーの無念を共有できるが、しかしすでに南部人読者の中で神格化されたリーの男らしさはその無念によっていささかも損なわれることはないだろう。また、「そびえ立つ男たち」のテネシーの現代人の語り口もまた、現状を嘆きつつも「そびえ立つ男たち」の種を宿した男として、かつての父祖たちと容易に同化する。「そびえ立つ男たち」として表象されるテネシーの父祖たちを描いたこの詩においてはむしろ、そうした父祖の姿がいや増しに前景化されており、このことは、一九二七年という文脈ではとりわけ脱男性化をはかる北部による南部叩きへの応答として、テネシーの父祖との系譜を提示することを介してテネシーを再男性化する効果を持ちうるものである。

こうした父親の創出についておそらく一番ラディカルかもしれないのがアレン・テイトによるみずからの家系の改変である。第二巻が待たれるアンダーウッドの伝記によれば、テイトは自伝に父母はテイトがヴァージニア生まれと嘘をついており、それを自分は三〇歳まで知らなかったと書いたが、実はそれこそが嘘であり、テイトはそれ以前か

ら自分がケンタッキー生まれであることを知っていた(4)。「両親から逃げる一方で祖先を理想化する」、「精神的孤独をイデオロギー的な安定で置き換えること」がテイトの政治、文学におけるテーマであるとアンダーウッドは述べているが(5)、その置き換えは自らの出自を六〇歳過ぎて書いた自伝においても「三〇歳まで知らなかった」と言うことで果たされている。三〇歳までヴァージニア人であると信じていたというのは、とりもなおさずヴァージニアという南部紳士の郷と繋がるものとして自己成型する物語を選び取ったと言っているようなものだからである。父や父祖、あるいは過去の英雄たちは、ウォレンやテイト、デイヴィッドソンの手によって男性的なものに作り替えられている。これは、南部の男性性を否定する表象に対して、南部(男性)に男性性を再度取り戻す書き返しの行為と言えるだろう。が、それにしても、それがなぜ自分に向けられずに父に向かうのだろうか。

*英国を父として

このような男性的な父親的人物の大量創出をいったいどのように説明したらいいだろうか。このとき男性的な父祖と対比されるのは現在の不毛さであり、そこから現実の、あるいは表象のうえでの父親と断裂し、むしろほとんど神話的な「父祖」に同化していく身振りについてはどう考えたらよいだろうか。デイヴィッドソンの「そびえ立つ男たち」の語り手は近代社会の中で父祖たちの力が弱体化したことを嘆きつつ、その父祖と一体化しようとする語り手であり、またリー將軍は自らのことなど語り得ない敗将として独立戦争の英雄だった父の回顧録の改訂をこそ自らの仕事とする。そのリー將軍と同化する書き手は従って、やはり現在の自分を語り得ない状況をリー將軍が自らを語り得ない状況に重ねあわせているが、しかしそれをつうじてリー將軍というまぎれもない南部紳士の父祖と、そしてリー將軍が敬愛するその父親とも重なりあっている。そしてテイトの父親作り替えはむしろ現実の父と、自らの内の父の

血を否定して想像上創出した最も正統的な南部人といえるヴァージニアの父との勒帯を仮構する身振りである。

直接の父とどこかで切り離された自分たちが、英雄的な「父祖」としての遠い祖先を表象し、それと切り結ぼうとするこうした行為は、あらたな系譜作りとして一種のファミリー・ロマンスとは言えないだろうか。南部文学研究においてこの用語を使うと、今や古典的な研究書『南部ルネッサンス』（一九八〇）においてリチャード・キングが、フロイトのエディプスの図式を援用しつつ、その中心に「家父長的な表現の中心に位置するのは父で……このファミリー・ロマンスは息子を父に対して反目させ、多くの場合、孫と祖父とを結びつけた」(343頁)とした図式を思い出す。また、後藤和彦はこうした祖父、孫の結びつきを、むしろ敗北以後、文学が醸成されるために必要だった時間として捉え直している(二二二―二三)。しかし、ここではファミリー・ロマンスをむしろリン・ハントがフランス革命を論じる際に提示した意味合いで使ってみたい。

フロイトの「ノイローゼ患者の出生妄想」によれば、自分が好ましくないと思っている両親から解放され、一般的には社会的地位のより高い他の人物が両親にとって代わる空想をめぐらす現象がファミリー・ロマンスである。子どもが両親に愛情を受けていないと感じるとき、その両親が本当の親ではないと空想するわけだが、そこにはさらに本当の父母は高貴な人だったという血統空想が入り込むこともある。フロイトにとっては、これはあくまでも個人(特に少年)が社会秩序における自分の位置に關してめぐらす空想として捉えられている。

リン・ハントは一九九二年に上梓した『フランス革命と家族ロマンス』で、フロイトの議論を下敷きしながら、その概念を集団的な政治的無意識を指すものとして使用している。つまり、フランス革命期、革命の主体たる男たちは自分たちの政治的両親としての王と王妃を別の家族に変えて、兄弟愛でつながる子どもたちの家族へと転換して、あらたな政治秩序を創造・想像した(九一―一一)、という理論枠を用いて革命期の様々な表象を分析するのである。

南部叩きに対して応答する、というのは一種集団的な自己イメージを発信することではあるが、とりわけ農本主義者たちがその表象行為を介して行おうとしたのは、こうした想像上の系譜の作り直しではなかっただろうか。想像的な創造行為として新しい父や父祖的な人物を作り出すことによって、想像上の父親殺害や継子幻想、あるいは、「本当の父は別の高貴な人」であるという幻想を表出するという文学的営為が行われていた時期が、まさしく彼らが農本主義者として南部社会の想像上の独立宣言を企画していた頃に重なっていたということを考えるなら、農本主義社会におけるあらたな社会秩序に住まう人々のイメージをそこで創出していたと考えることもできるだろう。

農本主義者たちがあたかも親を亡くした子のように、別の父、あるいは父祖像に自らを重ねあわせるとき、そこにはそうした父祖から逆照射される何ものかとしての農本主義社会が想定されていて、その際にほんものの父親なるもの（想像上であれ、現実の父であれ）から我と我が身を切り離す行為が付随する。このような切り離し／切り結びはおそらくひとつのことの二つの側面である。さて、こうした切り離し行為はいくつかの局面を持っている。ひとつは父との断裂。これはアレン・テイトの出生逸話がそのままファミリー・ロマンスの例と言える。また、テイトの『父たち（The Fathers）』（一九三八）においては、過去を回想する語り手レイシーにとって、旧南部を象徴する父も、その父と対照的に、個人主義、現実主義に生きるジョージ・ポウジーも、おそらく同化できる対象ではない。デイヴィッドソンの「そびえ立つ男たち」の語り手は、遠い時代の父祖たちを思い彼らと同化することはあっても自らの父を語ることがなく、その意味では切り離された息子と言える。こうした切り離しを集団的なものと考えたら、農本主義者のグループとしての彼らは、ひとつには『フュージティヴ』序文にあったような、「お上品なヴィクトリア朝的な旧南部」の系譜に我が身を置くことを拒絶して切り離された、また近代主義の産業化された社会からも切り離された、孤立した息子たちである。

このように文化の上で、あるいは創造・想像の中で、あるいは現実において自分の生みの親に当たる父との勒帶を切断する行為を介して、フュージティヴ詩人で農本主義者のテイト、デイヴィッドソン、ランサム、ウォレンらは男らしい建国時代の英雄や、南北戦争の英雄の世代を肯定し、むしろそうした父祖と切り結んでいくのである。そして、デイヴィッドソンのテネシーの詩に入り込んでいたネイティヴィズム的なイメージや、テイトにとってのヴァージニアという発想を考えたとき、そこにはアングロ＝サクソンの系譜というイメージが生ずるだろう。しかし、これを南部から外に出て、南部の文化自体の父祖を考えると、もしも文化の父祖を、アメリカ建国以来の文化の中心とされてきたニュー・イングランドに置かないならば、一体何をして父とすればよいのだろうか。南部の父祖はそれではどこから来たと考えればよいのだろうか。その時彼らの想像力は大西洋の向こう側に還っていく。

『フュージティヴ』の序文で否定される「旧南部の上流の特権階級」は「旧南部のお上品な階級 (high-caste Brahmins of the Old South)」と呼ばれていた。もちろんこれは直接には一九世紀後半以降の地方色文学、お上品な伝統に属する文学を指すと思われるが、同時にこの“Brahmin”は、とりわけアメリカではニュー・イングランドの古い家系のイメージが強い語である。アメリカの文化を先導してきたニュー・イングランドの過去ですら父として適切ではないと見切ったとき、彼らの想像力は海の向こうに父を見いだしたかのようである。ハーヴァードに行かずにもしるイングランドに留学したランサム（一九一〇—一三年、ローズ奨学金）、テイト（一九二八年、グッゲンハイム奨学金）、ウォレン（一九二八—三〇年、ローズ奨学金）ら農本主義者は、ニュー・イングランドというアングロ＝サクソン系アメリカ文化の生みの親を棄て、大西洋の向こう側に「より高貴な親」を求めたのである。

テイトの『ジェファソン・デイヴィス伝』のエピローグは、すでにランサムがおもな執筆者とされる『私の立場』の序文や、テイトが一九三五年に出す「南部における著述業 (The Profession of Letters in the South)」を先取り

している。ここでのテイトにとって南北戦争の性質は奴隷制を焦点とするものではない。

この戦争の起源は遠く……宗教改革以降のヨーロッパの歴史と切り離して理解することはできない……南部は西半球におけるヨーロッパ文明の最後の砦、絶え間なく拡張する産業主義の北部に保守的な抑制をかける存在であり、そのようにする責務を負っていたのである。南部はどこまでも時代遅れで、後ろ向きで、せかせかせず、自然の征服は最低限で満足していた……。ある意味では、宗教改革以来のヨーロッパの歴史が南北戦争に集約されていたのである。(301 傍点筆者)

南部こそ残存するヨーロッパである。テイトはここで、南部を子孫として直接ヨーロッパに接続し、しかも南部の社会に対して早くも「農本主義」という語を使っている。そしてヨーロッパであるゆえの「後ろ向き (backward-looking)」は、テイトの一九四五年の文章「新しい地方主義 (New Provincialism)」(272)、およびランサムが『私の立場』に寄せたエッセイ「再建されても心は変わらず (Reconstructed but Unregenerate)」にも出てくる(5) キーワードである。後ろ向きな伝統社会として、イングランドに繋がろうとするランサムのエッセイでは、そうしたイングランド社会は「混じりけなしの (unadulterated) ヨーロッパ主義の核」(5) を備えているのである。

農本主義者にとつての、イングランドと直結する南部。それは多分に階級性をも帯びている。そもそも一九二〇年代の前半に、メンケンによる南部の文化が不毛であるという意見や、UNCの社会学の一派による南部の自己批判に動じることがなかったのは (Hobson 208)、自分たちがその批判対象たる貧乏白人や生き残りの旧南部の “Brahmin” とは違うという意識があったからとも言えるだろう。このヒントとなるのが、ニーボーンが、南部人が南部を

語る際の階級性の例として引いてきた南部のリベラル・ジャーナリストのホディング・カーターの逸話である。一九二四年にルイジアナの実家に戻った際にKKK批判を行ったところ、祖母が露骨に嫌な顔をしたのに対して、昔のKKKは良かったが、今のKKKが良くないのであると弁明したというエピソードについてニーボーンは、一九二〇年代のKKKが貧乏白人主体の団体になっていることへの階級批判であると分析し、南部人による南部論の分析の際に階級という要素を持ち込む必要性を述べている⁽³⁾ (27-28)。

実際『私の立場』の序文は、産業化に対抗する農本主義に芸術の可能性を見ているわけだが、それを担うのは貧乏白人とは考え難い。また同書に収められたスターク・ヤングの論文ではイングランド人が一番つき合いやすいアメリカ人は南部人である、と述べられているが、それはなにより南部には貴族的な教養の伝統があるからなのである(338-359)。同じく『私の立場』のランサムの文章「再建されても心は変わらず」においても南部は「ヨーロッパの文化の原理にしたがった文化を造り、擁護してきた、アメリカ大陸唯一の地域」(36)で、また中でもイングランドこそが南部文化の原型とされている。その際にそうした文化を持つ社会は田舎で、産業化されておらず、またそこに生きる人々には「芸術、宗教、哲学への愛が自発的に生じ」(7)、しかもその性質は「安定し、あるいは代々受け継がれていく」(5)。

このようにイングランドの社会と文化をその父祖ないしはひな型としてイメージされる南部とは、産業化の弊害の埋め合わせとしての「詩を読むこと」が成り立つ社会であり、詩の「審美形式」によって失われた秩序を取り戻し得る(Ransom, 1938 40-42)、そうした文化を持つ社会としてきわめてエリート主義的なイメージに彩られている。芸術を好む性質を「自発的」なものとする姿勢は、大衆嫌いのオルテガ・イ・ガセットが「芸術の非人間化」(一九二五)において「芸術のための芸術」を語る姿勢と通じるものである。オルテガ・イ・ガセットは新芸術を「芸術のた

めの芸術」であるとして、ロマン主義や自然主義に對置する。後者が大衆に受けるのはそれら作品の例えば登場人物の悲劇そのものに大衆が感情移入してしまい、虚構として見る事ができないからである。それに対して新芸術は、そうした鑑賞を許さぬゆえに受けが悪いわけだが、そもそも純粹芸術を目指す新芸術を鑑賞する感性は才能を持った少数者にしか理解できない、つまり「ある階層の人びとが、他の階層の人びとが持っていない、ひとつの理解のための器官を所有している」からなのだ(四〇)。そして、その少数者たちは芸術をその内容で理解するのではなく、むしろ芸術の「非現実的なイメージ、つまり虚構」の部分を見る。芸術作品を透明なガラスとすれば、そのガラスの部分に焦点を当てるのであって、そこを素通りして内容に興じてはいけないのである(四五)。この少数者は、「多数者を無効にまわして戦う」ことをその使命としている(四一)。

一九二五年という南部にとっては意味深いこの年に奇しくもオルテガ・イ・ガセットの発表したこの文章の発想は二点において、農本主義者の発想と重なりあう。ひとつは芸術を理解することの階級性、しかもその少数からなる人々が他人から理解されないその芸術の鑑賞眼を持つて生まれたかのように語ることである。これは農本主義者たちが進歩主義のアメリカにおける少数の伝統主義者を自認していたこと、しかも彼らの思い描く社会が芸術を「自発的に」理解する社会とされていたことと重なりあっている。オルテガが評価する新芸術はおそらく当時台頭していたモダニズムとみて差し支えない。また、ロマン主義を嫌うオルテガによる芸術は内容よりもむしろ形式を鑑賞すること、という形式主義に向かう傾向があることもまたロマン主義を嫌い形式を読み込める形而上詩やモダニズム詩を評価した新批評の批評態度と通底する。オルテガを例に引くブルデューによれば、こうした形式主義的な批評眼の行使は特権的な鑑賞眼として、芸術と生活の連続性を肯定する大衆美学の対極にある極めて階級的な営為である(四八―五七)。とすれば、ランサムやテイトが思い描く農本主義社会とは、芸術を解する階級の間で構成された文化エリー

トのイメージを持つ、まさしく芸術と生活、あるいは社会が連続して切り離すことができない共同体として想像されたものと言える。ポール・マーフィは南部農本主義、特に『私の立場』への解釈がこれまで南部概念、社会思想、文学伝統の三通りで解釈されてきたと、研究や解釈の傾向を分類するが(57)、オルテガ・イ・ガセットと重ねあわせることによって明瞭になるのは、農本主義者の描いた社会が、詩を理解できる社会として設定されるとき、そもそもその社会はすでに限られた者からなる社会として想定されていた、ということである。このことが示すのは、農本主義は社会思想であると同時に南部概念であり、それはまた同時に一定の芸術観に裏打ちされたものであるということだ。つまり政治と美学が表裏一体となった想像の総体こそが『私の立場』南部農本主義社会なのである。

さらに言えば、進歩主義を信奉し、産業化された社会に住む男たちは、スターク・ヤングの言葉を借りるならば神経症的で身体的にも軟弱(三五四)であるから、どうやらイングランドと文化的に直結し、産業化のアンチテーゼとして想像される農本主義社会はまた男らしさを失わない社会でもある。オルテガ・イ・ガセットが大衆を嫌う、そして大衆から嫌われる新芸術を若々しく男らしいと形容していることは、こうなると興味深い。このように階級性を視野に入れたとき、最終的にドナルド・デイヴィッドソンが新批評家にならなかったのは、少なくとも彼の意識はエリートの出にはなり得なかったこともまた理由のひとつであろう。その意味でホブソンや後藤がドナルドソンを、本当の生まれはともかくとしてエリート意識は高かったテイトと比較する議論(Hobson 180-243; 後藤 一三一—一四〇)は当を得たものだ。

いずれにしても、特にモダンな「芸術のための芸術」を理解するには大多数と違う目を持つことが必要であり、本来は教育の成果にもかかわらず階級制を維持するべく「生まれつき」のように見せかけられる資質は、オルテガのようなヨーロッパ人であるならば階級によって、あるいはそうした階級の「血」によって保証されるものかもしれない

が、それが農本主義者にとつての南部の場合、ヨーロッパ、特にイングランドとのつながりにいて保証されるのである。彼らの南部は農本主義であっても奴隷制の負のイメージを漂白した「白い地方」であり、また知的エリート層を自認する男たちが創った多分に人種、階級、ジェンダーの刻印を帯びた想像の共同体なのである。

だから南部の文芸ルネッサンスが「イングランド」のそれとたとえられるとしても不思議ではない。それは南部が近代化して伝統社会が崩壊するあわいに生じるが (Ransom, 1935 195) しかしそのことは少数派として残った人による文学行為であり、また、そこからすればテイトが一〇年後の一九四五年に「新しい地方主義」で南部のルネッサンスを語るとき、それは既に終わったものとして保存されていることであり、南部ルネッサンスは、失われた農本主義社会と同じく、すでに終わった文学上の現象として保存可能なものとなっているのである。

これと同じことは農本主義者が新批評を実践するときにも起こる。オルテガがロマン主義を評価しなかったのと同様、農本主義者のエリート主義的な鑑賞眼は芸術を芸術として、つまり内容よりは形式に目を凝らすものという批評態度を詩の解説にも持ち込んでいる。だから彼らにとって文学は小説ではなく詩であり、詩の中でも読者がしばしばその内容に感嘆するロマン派ではなく、韻律に支配され、かつ難解な形而上詩やモダニズム詩なのである。

たとえば、ブルックスとウォレンによる『詩の理解 (Understanding Poetry)』(一九三九) は、「詩を詩として読む」——つまりオルテガの主張にもあったように主人公が何をするか、というストーリーに惹かれたりするのではなくむしろそれが作品として自立したものとして目を凝らす——ことを生徒のみならず、その教え方を教員にも教えるという目的を持った教科書である。詩の配列もまたそうした発想に沿っており、まず導入部分で物語詩や叙述的な詩がまとめられ、物語詩のところには「無名」の詩人の作品と一緒にスコットやワーズワースの詩が、また叙述的な詩のセクションには T・S・エリオットなどが混じるものの多くはロマン派詩人やシェイクスピアなどが入れられる。

むしろこの教科書が本領を発揮するのはその形式分析には欠かせない韻律形式やイメージリーに関わる章であり、そこに多くの形而上詩やモダニズムの詩が入れ込まれている。

ランサムによる『新批評 (The New Criticism)』(一九四一)もまた、「新批評」の対象として詩が当然視されているような本である。詩は「存在論的密度」(335)を本来持ったものだが、それを伝統主義に敬意を払うモダニズムの詩人たちは実現しているとランサムは述べる。現代の日常生活に浸透した「ビジネス、科学、実証主義」を嫌悪するそうした詩人たちとは、パウンド、エリオット、テイト、ウォレス・ステイヴンズである(335)。ランサムは、基本的にはイングランドの詩と詩人を論じた最後にステイヴンズやテイトを忍び込ませることにより、アメリカのモダニズム詩をイングランドの詩に連結させていく。

同時代の支配的な趨勢に背を向ける「後ろ向き」の少数派は、その存在根拠としてアメリカ文化の父のごとく振舞うニュー・イングランドを拒み、文化のうえでも、自らの文学創作においても英国にその血脈を——父を——求め、ニュー・イングランド率いる北部の息子であることを拒む。農本主義者の政治運動と文化運動は、南部の正当な父祖的人物を復活させたうえで、さらにその源流をイングランドに求めるという意味では、ニュー・イングランドを祖とする文化の系譜を拒む、文化的な連邦離脱行為であったと言えるだろう。

*父としての孤児

農本主義者の父親表象をリン・ハント的な意味でファミリー・ロマンスと読み解いた場合、彼らの「再建されたが心は変わらない」連邦離脱の再演の身振りは、北部のみならず、北部が代表する連邦という父を拒むことでもある。その際彼らは南北戦争の英雄と、さらにはイングランドとを父祖的なフィギュアとして接続し、想像の系譜を紡ぎ出

すのだが、しかしこのとき、この息子たちは自らの系譜をどのようにその先へとつなげていこうとしたのだろうか。

一九三〇年の『私の立場』で旗揚げされた農本主義はニューディール政策の本格化とともにその有効性を失っていく。少なくとも『私の立場』で仮想された農本主義は「対北部」であったのだが、ニューディール政策とともに南部の語られ方が「地域主義 (regionalism)」のそれに、つまり「アメリカ合衆国の中の一地域」に変化し、南北の二項対立が成立しづらくなったことはその一因だろう。

農本主義者が敵対視するグループのひとつが南部のリベラル学者であったことは先に述べたとおりだが、UNCの社会学者オーダムは、もともとフォークロアなど比較的庶民的なものに対する関心から出発したみずからの社会学を、州単位よりはむしろ南部全体を網羅するものへ広げていく過程で、そうした様々なものを総合的に「地域 (region)」と称したうえで、さらにその南部という地域を対北部ではなく、アメリカの一部として位置づけるようになる。この方向性をオーダム自身は「地域主義」的アプローチと呼んでいる (Hobson 196-202)。こうした発想は、たとえばあいかわらず南北の枠組みで南部を捉えようとするデイヴィッドソンにはそれこそ北部から——「ポトマック川の北側」——から来た発想であるとして看過ならぬものだったが (Hobson 223)、しかしニューディール時代に支持を受けたのはむしろオーダムの立場だった。

このような地域主義は当時の文脈で言えばニューディール期独特の発想であった。宮本陽一郎によれば、ニューディール期のナショナリズムは二〇年代のように有色人種や移民を排除して国家を逆照射するそれとは違い、むしろ地域や人種、階級等々の多様性を包摂することで国家の全体性を維持するものであったと位置づけられる (二九五—三〇二)。たとえば、前章で取り上げた「南部の経済状態に関する会議」によるレポートが、オーダムが収集したデータと、ジョンソンの著作を下敷きに南部の問題を「経済」で語るのもそのような背景においてである。

農本主義を対北部で語る枠組み自体が揺らぐとき、彼らの政治学は、一方では『誰がアメリカを所有するのか (Who Owns America?)』(一九三六)に代表される反ニューデールの政治論文へ、他方ではエリート主義的な、一見政治性を排したかのように見える美学へと向かい、南部にあらたなる文学伝統の構築を試みる。前者に寄稿したのは『私の立場』に文章を寄せた中ではテイト、ランサム、ウォレン、デイヴィッドソン、ライル・ラニエ、アンドリュース・ライトル、ジョン・ドナルド・ウェイドの七名。さらにヴァンダービルト大学の若い仲間で新批評家として名を成すクレアンス・ブルックスも文章を寄せている。

その一方でテイトやランサムは一九三五年あたりから政治言説を美学へとコード変換していく動きを見せはじめる。テネシーで生まれ育ち、決してエリートの意識は持たなかったデイヴィッドソンは、ホブソンや、マルヴァシ、あるいはマーフィや後藤の指摘するとおり、南部に徹底的に帰依し、そのために最終的にはテイトやランサムのように中央に躍り出ることをしない徹頭徹尾南部人であったので (Hobson 180-243; Malvasi 190-219; Murphy 46-47、後藤 131-140)、¹⁾ じつではその政治学を抽象的美学に転化し得たランサムとテイトの言葉に焦点を絞って再考してみたい。

この時期、政治論文を書きつつ南部文学を語りはじめるテイトやランサムの文章は、地域主義が人種や階級の枠を払ってすべてを包摂する言説を押し出す力に対抗する場を文化言説の構築に求めるかのように、政治言説と美学言説が混じりあう、さながら汽水域のような状態になっている。しかしよく見ると、ランサム、テイトともにある種の語彙を共有しており、それを使って政治、文学双方について語るのである。この際意義深いのが一冊全部を南部特集にした『ヴァージニア・クォーターリー』一九三五年四月号である。その中の、特にテイトによる「南部における著述業 (The Profession of Letters in the South)」およびランサムによる「南部的なモダン (Modern with Southern

Accent)』は、どちらも南部社会の現状を語りつつ、それを文学の現状へと接続する。先にも述べたように、『私の立場』で想定される社会がジェンダー、階級、人種の限定を受け、なおかつそうした階級に特化した文化を想定するなら、そのときの社会と文化のありようは不可分の結びつきを持つ。そうしたとき、社会のありようと美学とは表裏一体のものとなる。彼らはこの表裏一体の社会と文化の、いわば表と裏のうち、強調される面を交替させていく。文化を前面に押し出すことで農本主義的社会のイメージを後退させ、しかしその文化に再び、ジェンダー、階級、人種の排除の論理を忍び込ませていく。

南部の社会、文化、文学をめぐるランサムとテイトのエッセイは相補的に読めるものになっている。まず、彼らとともにそのエッセイの中で、立ち後れて近代化に翻弄される南部をそのまま現実として認めている。いわゆる金融資本主義を社会の害悪とする発想は、『私の立場』やその続編とも言える『アメリカは誰のものか』と通底する発想である。メンケンの「文化の不毛」説を容認するかのように、南部には芸術の伝統はないといったんしたうえで(Tate, 1935 165)、しかし近代化の波に洗われて死に体になっているその状況をこそランサムはモダニズムの契機と捉え返してこく(Ransom, 1935 186)。しかもそれはテイトに言わせれば「ヨーロッパ的」(165)であり、黒人の文化伝統とはなんら関係なく(169)、さらにランサムによれば地方主義文学ともなんら関係のないものである(187)。つまり『私の立場』と同じ発想がここにも踏襲されているのだが、それはとりもなおさず一九三五年の段階では、ニューディールの発想の否定でもある。ニューディラー公認とも言える地域主義的な発想が認めるもの——フォークロアも、黒人の文学伝統も、あるいは実際に盛んだった地方色文学も——すべてを「不在」として隠蔽するからである。彼らは現実存在するこうした南部の文化伝統を自らの文学の父と認めない身振りを介して英国と直結し、かつて極めて階級色の強い「無私な(disinterested)」(Tate, 1935 167)文学の系譜の構築を試みる。

「無私な」という語はランサムが南部に花開く南部モダニズム（その後南部ルネッサンスと呼ばれるもの）を語る際の形容でもある（Ransom, 1935 188）。もちろんこれは作品から距離を取ることで鑑賞力として、階級性を帯びた態度である。ランサムははやくも新批評的な批評枠を駆使して、上記で排除されたものの他に、リアリズム文学、プロレタリア文学、リベラルなメッセージを含む文学も排除していく（193）。

もちろん南部文学のカノンが白人男性中心であるということはすでにキャロル・マニングらに指摘されていることだが（Manning 1-12）、ここで考えたいのは彼らの文学批評の言説がすでに内包している男性性である。エリオットの「伝統と個人の才能」（一九一九）が詩のカノンのラディカルな書き換えであり、それは、たとえ「男性的な」という語を使わずとも、感情と個人であることから逃げてロマン主義を排していくという身振りがすでに男性的なカノン形成の過程であるとし、また彼ら批評家にとっての文学とそうした批評家がハイ・カルチャーのコミュニティであり、なおかつ「男のクラブ」であったとするサンドラ・ギルバートとスーザン・グーバーの議論（125-54）が農本主義者にも当てはまるのではないか、ということでもある。文学者として想像される彼らの共同体もその営為もすでに白人の男性が作るものであり、それは単にアメリカ文学のカノンが従来そうであったというのみならず、男性性を軸にして語られてきた南部と、そうしたことへの捉え返しとしての文学集団の構築という文脈においてそうなのである。このことをタイトの「南部における著述業」で言うならば、タイトは「女性作家」というジャンルを明瞭にもうけてそれを排除するわけではない。しかし、タイトが芸術の伝統がないと言うとき、それは、正確に言えば、伝統がないというよりもむしろある特定の文学の伝統を「不在」として扱うことを介して不在になるのである。実際タイトは、南部の文学を非男性的なものとして語る語彙を採用し、南部は「ぼんやりと弱々しい（vague and feeble）」（169）ものしか生んでなかったし、「無私の文芸への活力（vitality）がなかった」（167）とする。これを、「南部におい

て文筆を生業とするなら、「善き文学の様式を侵犯する (the violation of good literary manners)」ことが必要である (173) とする主張と重ねあわせると、あるべき作家像、つまりモダニズムの作家像は、あるいはそうした作家を軸に組み立てられる伝統は、にわかに男性性を帯びてくる。スーザン・ドナルドソンは、キャロル・マニングやアン・グッドウィン・ジョーンズによる南部の女性作家の系譜をめぐる仕事を踏まえつつ、テイトのそうした記述の仕方がオーガスタ・エヴァンズ・ウィルソンやE・D・E・N・サウスワースなど「善き文学様式」を体現していたと思われる一九世紀の女性作家たちからモダンな南部文学を切り離そうとする意図を持つものと指摘している。こうした隠微かつ徹底した排除作業抜きにして南部の文芸が突如として、あたかも不毛の空白から「復活」するルネッサンスは起こりえないのである。

さらに注目したいのは、ランサムが先に挙げた一九三五年の論文の中でリベリズムを語る際の語彙である。リベラリズムが文学を「侵略 (invade)」した「輸入品 (importation)」(194) であるとするその語り方は、前章でKKKのエヴァンズがリベラリズムを外国のものと位置づけ、「異邦人 (alien)」の「侵略 (invasion)」(Evans 2) としたことに重なりあう。しかもランサムはこうしたリベラルの倫理的な意図が「審美的な意図」をいとも容易にくじいてしまうものとして「アングロ＝サクソン」の共同体には自明であるとする述べる (194)。ここでもまた、敢えて人種や民族を指定して排除せずとも、文学する南部の共同体はアングロ＝サクソンのもの (なおかつリベラリズムを信奉しないアングロ＝サクソンのもの) として構築される機制が働いている。農本主義者が新批評家に「転身」し、南部文学をモダニズムに限定して新批評の枠内で評価して、ジャンルとして確立していく際、彼らの言葉は極めて「党派的」であるが、しかしその言葉は何を排除しようとするのか、あからさまにその対象を言わずともその語り方自体がその何かを排除するのである。

こうした語りは批評の言葉に受け継がれている。ジョン・ギロリーによれば、ブルックスが『よくできた壺 (Well Wrought Urn)』(一九四七)で、たとえばダンの“Canonization”を読む作業そのものが、ダンの当の詩を聖別する作業にはかならないとしているが(160)、新批評家の初期の作業はこのように詩のカノンをずらしていく企図を含むものだった。テイトがブルックスとウォレンの『詩の理解 (Understanding Poetry)』を擁護するかのよう(一九四〇年)に発表した「現代詩の理解 (Understanding Modern Poetry)」は、モダニズム詩を読むことが男らしい知的営為であること、一方でロマン主義の詩を読むことは女の行為で知的ではないこと、また知的ではないことはリベラリズムの教育も同様であるという立場を露骨に構築する語彙とレトリックに満ちている。

テイトによればロマン派の詩は「感情的」で、それは「思索的ではない (unreflecting)」読者に対して「感じよく (pretty)」、「心地よく (agreeable)」、「ピンクのリボンをかけて (tied up in pink ribbon)」差し出われ、「容易」に理解できるものである(562)。他方、モダニズム詩はその対極にあって「知的な力 (intellectual power)」(563)を必要とするのだが、リベラル派によるプロGRESSIVEヴィズムに基づいた、印象批評を教える「男のプリマドンナ」教授(567)による教育は知性より感性を育ててしまうから「国民は文盲」(564)になってしまう。結果としてモダニズム詩が「難解」だとして読めなくなるのだが、しかしモダニズム詩が無理ならばジョン・ダンの詩は到底読めるはずもない。つまり、ジョン・ダンの詩が難しいのは、PROGRESSIVEヴィズム教育が「知性」をもって「能動的 (active)」に読むことを教えようとせず、単に「身を横たえて受け身になる (to lie down and be passive [sic])」ことばかり教えるからなのだ(568)。テイトが人口に膾炙したロマン派の詩を読む行為からモダニズム詩を読む行為へとカノンを転換させるレトリックには露骨なジェンダー化がつきまとう。

さて、右に挙げたテイトの論文が掲載されたのは『カレッジ・イングリッシュ』である。つまり、それは文芸批評

の雑誌ではなくむしろペダゴギーに関わる雑誌に掲載されているのである。もちろん、新批評を批評として格上げする作業は『サザン・レビュー』、『スワニー・レビュー』、『ケニヨン・レビュー』などをつうじて行われていくわけだが（越智二〇〇二）、その一方で批評の言葉を「教育」に結びつけ、そうした雑誌に掲載するテイトの姿勢は、南部ルネッサンスを評価する新批評が、多分にジェンダーの刻印を帯びたものとしての「読む」ことをめぐる教育の方法として地歩を築いたことを示している。

こうしてみると新批評とは、男らしさに欠けたロマン派詩を受動的に読む行為を捨てて、能動的に形而上詩やモダンイズム詩を読む知的行為を教え込む規律・訓練作業という側面を持っていると言えそうである。実際テイトの「現代詩の理解」が念頭に置いていたはずの、その前年に出されたブルックスとウォレンの『詩の理解』（一九三九）は、同年ブルックスが出した『現代詩と伝統』が要するに詩の文学史を書き換える書物なのに対し、むしろ学生が詩を読むためのテキストであり（さらに新批評に馴染みのない教員を教育する意図もある）、また後半に行くに従い難易度が上がるという構成を取っている。あたかも最初の物語詩を読むには知的能力はさして必要ではないが、後半の形而上詩を読むには男らしい知的能動的訓練が必要であると言わんばかりに。

『詩の理解』冒頭近く、この教科書を読む学生に向けたイントロダクションでは、一般的な詩についての誤解を正す作業が行われるが、それはテイトが一般受けしているロマン派の詩に対してつけた形容と同類のものである。曰く、詩とは、通常「美しい感情 (fine sentiment)」に「美しい美」の言語 (fine language)」「美しい言明 (beautiful statement)」で書かれた「糖衣錠 (sugar-coated pill)」のような「心地よい (agreeable)」なものであると思われるがそうではないとしたうえで、「実用的ではない関心」に向けた人間の本能を満たすものとしての詩 (xlviii, iv) の解説に入っていくのである。

ブルックス、ウォレン、ランサム、テイトが新批評のカノンで詩を読む教育をつうじてそうしたカノンに承認された詩と、それを読む行為とを男の領域へと領有しようとしていたまさに同じ時期に別種の男性性構築のプロジェクトがあった。大恐慌の時代、一九二〇年代に噴出した移民や労働者階級に対する白人男性の不安は、その不安要因となる集団の文化をブルースやフォークロアの採取というかたちで国家の中に包摂的に統合することにより、あたかもそのような不安がないかのように、その表現の回路を断ち切るかに見えるが、しかし同時に同じくニューディールの一環で植林や治水に関わった「民間国土保全隊 (Civilian Conservation Corps)」(CCC) にその不安の水脈は受け継がれているのである。軍隊を思わせる“Corps”で語られるこの保全隊に徴集されたのは、おもに都市の害悪でやせ細り、国家の危機に手を貸しかねない移民の青年たち——つまり一九二〇年代の不安要因——とされていた。そしてCCCの機関誌は、ブライアント・サイモンによれば、常に彼らひ弱な青年がいかに立派に「男になったか」を語るレトリックを使い続けていた。しかもその際、CCCは彼らの体格向上と並行して、アメリカ史や読み書きなどを教え込み、アメリカ人化を目指す教育を授けている。サイモンは保全隊のポスターや機関誌のそうした男らしさ構築のレトリックが白人中流男性の不安要因を取り除く装置、中流男性化する装置であったと結論している (31-60)。

ほとんど同じ時期にテイトがモダンズム詩を教える言葉に男らしさを滲ませるのは、同じ二〇年代の不安への応答であるとしても、その不安の源泉が都市部の移民男性に向けられたものと、南部を男性性欠如として語る言説という違いはもちろんある。とはいえ、南部の問題にニュー・イングランドの不安を投影した部分があったとするなら、都市の不安と南部叩きをめぐる男性性欠如を織り込んだ言説は、深層でつながっていることになる。少なくともCCCのレトリックは、二〇年代に提示された不安を解消するために男性性のレトリックが依然有効なものとして三〇年代にも存続していたということでもあるだろう。南部の再男性化の文脈の中で考えるなら、ブルックスとウォレンの

『詩の理解』もまた、モダニズム詩と形而上詩の読み方を知的な男性的営為として教えるという意味では、少年を男性にし、また文明化する教育装置であるとも言える。

詩をめぐるフュージティヴ詩人＝農本主義者＝新批評家たちの「党派」、あるいは「男のクラブ」的性質は、ティトラが当初から明瞭に意識しているものでもあった。マーフィは彼らがヴァンダービルト大学で行動を共にしていた事実、たとえばティトとウォレンが寮で同室だったことや教員のランサム宅にたびたび集っていたことなど、同じ生活を集団で営んでいた状況が彼らを強力な絆で結びつけ、ある種の兄弟関係にも似た同族意識を育んでいたことを指摘している。マーフィによれば彼らはしばしば自分たちのことを教会や友愛団体の仲間を指す“brethren”と称していた(11-12)。また、そうした堅固な関係は、はた目には「共同体 (community)」(166)に見えたとユードラ・ウェルティはインタビューで語っている。また、カリザース・ジュニアはティトがタイトルに宛てて書いた手紙でティトが自分たちのことを「兄弟の面倒を見る者 (brothers' keepers)」を自認するくだりを引用しつつ、彼らが一種の軍隊の (trooper) のようなものであったと評している (174)。

この党派性は、『私の立場』を企画する段階でも健在であった。ティトはデイヴィッドソンに宛てた一九二九年八月一〇日付けの書簡で、その企画が「最後のヨーロッパ人」として「敵」たるプログレッシヴ (リベラル) たちに対して「南部の内部で知的状況を創出する」プログラムであり、またそのための戦略的プログラムとして「自分たちのグループ」の人間からなる「明瞭に南部の反動主義者のアカデミーを形成」(Fain 229) する目的を掲げていた。

マーフィはティトがこうした軍隊のコマンダーとして、あたかも「リー將軍」のように文化闘争に一步を踏み出したとするが (48)、このたとは当を得ている。農本主義者たちは新批評という教育装置を創出することであらたに詩のカノンを書き換え、またリー將軍が南部の父であるように、それを教育する父になったのである。

結び

こうして、父的なフィギュアを文学創作のうえで大量に作り出した農本主義者たちは、みずからがマスキュリンな詩の読みとカノンの書き換えを行って伝統の創出を行う父となる。南部が南北戦争に負けたことをその起源とする限り、南部のイメージは負けた男の姿を背負う。一九二〇年代、みずからの地域の問題のみならずニュー・イングランドが抱えた不安がある意味で集中的に投影される場ともなった南部は、再び男性性を剥奪された存在だった。

最初は農本主義という「反動」の政治綱領であったものは、その後ニューデールの文脈で都市と田舎、産業と農業という二項対立が、つまり都市や産業を仮想敵とするその参照枠が揺らいで行く中で、美学へと転換されていった。ここまで述べてきたように、農本主義者の描く社会そのものが、人種、ジェンダー、階級を限定したところに成り立つものとして、「文化」のありようと一体のものであるからには、たとえ彼らが文化のみを取り出して語ったとしても、彼らの社会観という極めて政治的なものがそれを常に裏支えることになる。女、黒人、あるいは貧乏白人を、いや、自らの男性性すら無意識化したところに浮遊する彼らの詩の美学とそれゆえにアイコンとして存在する南部という言説は、脱性化されたかのように装いつつ、白人男性によるモダニズム南部文学を作り出し得た。

そして、彼らの息子に当たる世代が、すでに一九五〇年代から農本主義を「回顧」する研究書を世に問うことを繰り返すことで農本主義の起源も、一九四五五年の段階ですでに終わっていたと語られる南部ルネッサンスもひとつの歴史として凍結され、彼らは単なる父から父祖になっていく。たとえば一九五四年、MLA (Modern Language Association) と AAS (American Studies Association) 共催による南部の文学ルネッサンスについてのシンポジウム

が開催される。その様子は翌年文芸誌『シェナンドー (Shenandoah)』の特集として伝えられたが、そこでは世の中から「距離を取っていた (disengaged)」モダニズム詩人としてのフュージティヴ詩人たちはスコープス裁判で南部が誤った表象をされたことに對して立ちあがり、農本主義者へと転向したという起源が語られている⁽⁴⁾。その文章を寄せたのはルイズ・コワンで、一九五九年に『フュージティヴ・グループ (The Fugitive Group)』という著書を出すことになる。その前年に出たブラッドベリーの『フュージティヴ (The Fugitives: A Critical Account)』は、フュージティヴ詩人から農本主義への変転の原因についてはほとんど考えることなく、フュージティヴ詩人が批評家になる部分（つまり、農本主義をほぼ抜かした格好になる）を一線上で考えている本だが、注においてその原因としてスコープスも影響があったであろうが、それよりもむしろ別の原因があるのではないかという示唆をしている⁽⁵⁾。とはいえ、おそらくスコープス裁判を「転機」と考える方がその転身に思える身振りの理由として理解しやすいからか、あるいはそもそもそうした転身と考えることをするには明瞭なきっかけの存在を求めるからか、フュージティヴ詩人から農本主義者への転向をスコープス裁判に求めるコワンの著作はその後の研究が参照する基本書になっていく。一九八八年、ポール・コンキンが『サザン・アグレリアンズ (The Southern Agrarians)』において、「後の神話とは全然違って」、ランサムもデイヴィッドソンもテイトも一九二五年にいきなり南部を発見したのではない、という見解を出す⁽⁶⁾、おそらくその時期までスコープス裁判を転機とする節は定番であったと見ていいだろう。

このような「定番」は、フュージティヴ＝農本主義者＝新批評家のテイトやウォレン自身が実は定番として語っていたというふしがある。コンキンが指摘しているように、フュージティヴ詩人たちは「再会 (reunion)」をたびたび開く⁽³⁰⁾。一九五八年、ロックフェラー財団とASAからの協賛を得てヴァンダービルト大学で開かれたものは

五九年には一冊の本として出版されたほか、ハーヴァードで五八年に、同じ年に再びヴァンダービルトで、またその後も六一年、六二年に場が持たれている。先に紹介した「南部ルネッサンス」のシンポジウムなど、その他の題目（たとえば農本主義など）で開かれる再会イベントも含めるなら、彼らの再会の儀式はいや増しになる。そして、たとえば一九五六年の再会シンポジウムでライトルがスコープス裁判を転機と語ったことをはじめとして（Purdy 178）、一九二五年転機説は、丁度KKKの起源が「化石」として本当の起源を隠蔽しているように（Harcourt）、彼ら自身の口から農本主義の起源が後づけで語られることによって固定されていたのである。またそうであればここ次には農本主義から新批評への「転向」も一九三六年あたり、と起源を得ることが可能になる。このようにしてフュージティヴの時代も、農本主義の時代も、新批評の時代もそれぞれが別個に独立することで南部のモダニズムとして、あるいは農本主義として、あるいは新批評として、またそのことによって政治と美学を切り離して語るシステムの基礎ができあがっていった。

言説上で父を切り離し、別の父を求めた精神的な孤児としてのフュージティヴ＝農本主義者＝新批評家ランサム、ティート、ウォレン、そして新批評家ではないがデイヴィッドソンは、みずから語られる対象になることによって、彼らに忠実な弟子ブルックスともども南部文学の父祖的存在になり、多くの息子達を送り出したのである。

(1) アレン・ティートやジョン・クロウ・ランサム、クレアンス・ブルックスは、新批評の地歩を固めていく際に、印象批評や歴史や文献学のアプローチ等々を敵と見なしていた。ランサムの「批評会社（Criticism, Inc.）（一九三五）」はその意味で文学制度の差異の政治学宣言とも読めるし、また、そうした差異化をはかっていく際、ランサムは敵対する諸派を、たとえば難解な詩を読む能力がない（393）、などと断じて極めて攻撃的な言葉使いをしている。また、「詩の理解」が出されたころのテ

イトとブルックスの書簡にも敵陣営を「ノックアウト」するなど戦闘的な言葉がちりばめられている (Vinh 60-81)。

(2) 本論ではスキヤッグスの分析は行わないが、しかしスキヤッグスもまた本論で分析するその他の南部批判と同様一九二〇年代的な言説枠組みを共有している。例えば、ネイティヴィズムの発想を持ち、またアングロ＝サクソン系の優秀さをマスキュリティに接続するという点でスキヤッグスの議論はエヴァンズやタネンバウムと同じ発想のもとにある。たとえば、スキヤッグスは、南部の保守派白人の中にもその他の地域でより問題になっているラディカリズムが入り込んでしまった結果、「活力溢れる (virile)」ヒーロイックな愛国者だった父親世代に対し、その子ども世代の南部白人はすっかり外国からのラディカリズムに染まって「去勢された (emasculated)」唯物論者となり果てている (440) などと表現するが、こうした例を見ればタネンバウムやKKKKのエヴァンズらの発想との共通性は明らかである。

(3) ただし、現在ではKKKKはアメリカの右翼運動の基礎をなすものとして、階級をまたがって広い支持者を集めていたとする一連の研究成果があり、レナード・ムーアの『市民のクランズマン (Citizen Klansman)』(一九九一) などはその代表例のひとつである。

引用文献

- Barnes, Harry Elmer. "Sociology and Ethics: A Genetic View of the Theory of Conduct." *The Journal of Social Forces* III : 2 (1925) : 212-31.
- Bernard, L.L. "The Development of the Concept of Progress." *The Journal of Social Forces* III : 2 (1925) : 207-212.
- Berlet, Chip and Matthew N. Lyons. *Right-Wing Populism in America: Too Close for Comfort*. N. Y.: the Guilford P, 2000.
- Blee, Kathleen M. "The Gendered Organization of Hate: Women in the U.S. Ku Klux Klan." *Right Wing Women: From Con-servatives to Extremists around the World*. Eds. Paola Bacchetta and Margaret Power. N. Y.: Routledge, 2002.
- Bradbury, John M., *The Fugitives: A Critical Account*. Chapel Hill: The U of North Carolina P, 1958.
- Brazil, Wayne D. *Howard W. Odum: The Building Years, 1884-1930*. N. Y.: Garland Publishing, Inc. 1988.

- Brooks, Cleanth and Robert Penn Warren, *Understanding Poetry : An Anthology for College Students*. 1939. N. Y. : Henry Holt and Company, 1950.
- Burroughs, Edgar Rice. *A Princess of Mars*. 1912. N. Y. : The Ballantine Publishing Group, 1990.
- Carlton, David L. and Peter A. Coclanis eds., *Confronting Southern Poverty in the Great Depression : The Report on Economic Conditions of the South with Related Documents*. N. Y. : Bedford Books of St. Martin's P, 1996.
- Carrihers, Gale H., Jr. "Tate, Lytle, and the New Criticism." *The Southern Review* 32 : 1 (1996) : 172-182.
- Conforti, Joseph, *Imagining New England*. Chapel Hill : U of North Carolina P, 2001.
- Conkin, Paul K. *The Southern Agrarians*. Knoxville : The U of Tennessee P, 1988.
- Cowan, Louise. "The Fugitive Poets in Relation to the South." *Shenandoah* VI : 3 (1955) : 3-10.
- . *The Fugitive Group : A Literary History*. Baton Rouge : Louisiana State UP, 1959.
- Davidson, Donald. *Lee in the Mountains and Other Poems*. N. Y. : Charles Scribner's Sons, 1938.
- Degler, Carl. *In Search of Human Nature : The Decline and Revival of Darwinism in American Social Thought*. N. Y. : Oxford UP, 1991.
- Dixon, Thomas, Jr. *The Leopard's Spots : A Romance of the White Man's Burden, 1865-1900*. N. Y. : Doubleday, 1902.
- . *The Clansman : An Historical Romance of the Ku Klux Klan*. N. Y. : A. Wessels, 1907.
- Dobratz, Betty A. and Stephanie L. Shanks-Meile. *White Separatist Movement in the United States : White Power White Pride*. Baltimore : Johns Hopkins UP, 2000.
- Donaldson, Susan V. "Gender, race and Allen Tate's Profession of Letters in the South." *Haunted Bodies : Gender and Southern Texts*. Eds. Susan V. Donaldson and Anne Goodwyn Jones. Charlottesville : UP of Virginia, 1997.
- Evans, Wesley Hiram. "The Klan's Fight for Americanism" *North American Review* CCXXIII (March-April-May 1926) : 1-31.

- "Forward." *Fugitive* : 1, 1922.
- Fain, John Tyree and Thomas Daniel Young, eds., *The Literary Correspondence of Donald Davidson and Allen Tate*. Athens : U of Georgia P, 1974.
- Gaston, Paul M. *The New South Creed : A Study in Southern Mythmaking*. N. Y. : Alfred. A. Knopf, 1970.
- Gatewood, Jr. Willard B. *Controversy in the Twenties : Fundamentalism, Modernism, and Evolution*. Nashville : Vanderbilt UP, 1969.
- Gerster, Patrick and Nicholas Cords. "The Northern Origin of Southern Mythology." *The Journal of Southern History* XLIII : 4 (1977) : 567-82.
- Gilbert, Sandra M. and Susan Gubar. *No Man's Land : The Place of the Women Writer in the Twentieth Century*, vol. 1. New Haven : Yale UP, 1988.
- Guillory. *Cultural Capital : The Problem of Literary Canon Formation*. Chicago : The U of Chicago P, 1983.
- Hammer, Langdon. *Hart Crane and Allen Tate : Janus-faced Modernism*. Princeton : Princeton UP, 1993.
- Harcourt, Edward John. "Who Were the Pale Faces ? New Perspectives on the Tennessee Ku Klux." *Civil War History* LI : 1 (2005) : 23-66.
- Harrison, J. R. *The Reactionaries : A Study of Anti-Democratic Intellectuals*. N. Y. : Schocken Books, 1967.
- Hobson, Fred. *Tell about the South : the Southern Rage to Explain*. Baton Rouge : Louisiana State UP, 1983.
- Hunter, George W. Hunter. *A Civic Biology*. N. Y. : American Book Company, 1914.
- Johnson, Gerald W. *The Wasted Land*. Chapel Hill : U of North Carolina P, 1937.
- Kimmel, Michael. *Manhood in America : A Cultural History*. N. Y. : Free Press, 1996.
- King, Richard. *A Southern Renaissance : The Cultural Awakening of the American South, 1930-1955*. N. Y. : Oxford UP, 1980.

- Kneebone, John T. *Southern Liberal Journalists and the Issue of Race, 1920-1944*. Chapel Hill : U of North Carolina P, 1985.
- Kreyling, Michael. "Southern Literature : Consensus and Dissensus." *American Literature* 60 (1988) : 99-107.
- Krutch, Joseph Wood. "Tennessee's Dilemma." *The Nation* 121 : 3133 (July 22, 1925) : 110.
- Maclean, *Behind the Mask of Chivalry : the Making of the Second Ku Klux Klan*. N. Y. Oxford UP, 1994.
- Malvasi, Mark. *The Unregenerate South : The Agrarian Thought of John Crowe Ransom, Allen Tate, and Donald Davidson*. Baton Rouge : Louisiana State UP, 1997.
- Manning, Carol S. "Introduction : On Defining Themes and (Mis) Placing Women Writers." *The Female Tradition in Southern Literature*. Ed. Carol S. Manning. Urbana and Chicago : U of Illinois P, 1993.
- Mencken, H. L. "The Sahara of the Bozart." *The Literature of the American South*. Eds. William L. Andrews, et. al. NY : W. W. Norton & Company, 1998.
- . "Mencken Likens Trial to a Religious Orgy, with Defendant a Beelzebub." *Baltimore Evening Sun* July 11, 1925.
- . "Darrow's Eloquent Appeal Wasted on Ears That Head Only Bryan, Says Mencken." *Baltimore Evening Sun* July 14, 1925.
- . "Battle Now Over, Mencken Sees ; Genesis Triumphant and Ready for New Jousts." *Baltimore Evening Sun* July 18, 1925.
- Messerschmidt, James W. "Men Victimizing Men : The Case of Lynching, 1865-1900." *Masculinities and Violence*. Ed. Lee H. Bowker. N. Y. : Sage Publications, 1997.
- Moore, Leonard. *Citizen Klansman : The Ku Klux Klan in Indiana, 1921-1928*. Chapel Hill : U of North Carolina P, 1991.
- Murphy, Paul V. *The Rebuke of History : the Southern Agrarians and American Conservative Thought*. Chapel Hill : U of North Carolina P, 2001.

- Odum, Howard W. *Southern Regions of the United States*. Chapel Hill : U of North Carolina P, 1936.
- Owen, Russel. "The Significance of the Scopes Trial: Issues and Personalities." *Current History* XXII (1925) : 875-883. *Controversy in the Twenties*. Ed. Willard Gatewood, Jr. Nashville : Vanderbilt UP, 1969.
- Patler, Nicholas. *Jim Crow and the Wilson Administration. Protesting Federal Segregation in the Early Twentieth Century*. U of Colorado, 2004.
- Prenshaw, Peggy Whitman, ed. *Conversation with Eudora Welty*. Jackson : UP of Mississippi, 1984.
- Purdy, Rob Roy ed., *Fugitives' Reunion : Conversations at Vanderbilt May 3-5, 1956*. Nashville : Vanderbilt UP, 1959.
- Putney, Clifford. *Muscular Christianity : Manhood and Sports in Protestant America, 1880-1920*. Cambridge : Harvard UP, 2001.
- Rafter, Nichole Hahn ed., *White Trash : The Eugenic Family Studies, 1877-1919*. Boston : Northeastern UP, 1988.
- Ransom, John Crowe. "Reconstructed but Unregenerated." *I'll Take My Stand : The South and the Agrarian Tradition*. Twelve Southerners. 1930. Baton Rouge : Louisiana State UP, 1977.
- . "Modern with Southern Accent." *Virginia Quarterly Review* 11 : 2 (1935) : 185-200.
- . "Criticism, Inc." *Virginia Quarterly Review* 13 : 4 (1937) : 586-602.
- . *The World's Body*. N. Y. : Scribners & Sons, 1938.
- . *The New Criticism*. Norfolk : New Directions, 1941.
- Silber, Nina. *The Romance of Reunion : Northerners and the South, 1805-1900*. Chapel Hill : The University of North Carolina P, 1993.
- Simon, Bryant. "New Men in Body and Soul : The Civilian Conservation Corps and the Transformation of Male Bodies and the Body Politic." *Gender and Southern Body Politic*. Ed. Nancy Beraw. Jackson : U of Mississippi P, 2000.
- Singal, Daniel. *The War within: from Victorian to Modernist Thought in the South, 1919-1945*. Chapel Hill : U of North Carolina P, 1993.

olina P, 1982.

Skaggs, William H. *The Southern Oligarchy: An Appeal in Behalf of the Silent Masses of Our country against the Despotic Rule of the Few*. N. Y.: The Devin-Adair Company, 1924.

Stoddard, Lothrop. *The Rising Tide of Color against White World-Supremacy*. N. Y.: Charles Scribner's Sons, 1920.

Straton, John Roach. "The Most Sinister Movement in the United States." *The American Fundamentalist* II (December 26, 1925), 8-9. *Controversy in the Twenties*. Ed. Willard Gatewood, Jr. Nashville: Vanderbilt UP, 1969.

Strong, Josiah. *Our Country: Its Possible Future and Its Present Crisis*. New York: Baker & Taylor, 1885.

Sunday, Billy. "July 4, 1925 Letter to William Jennings Bryan." *Controversy in the Twenties*. Ed. Willard Gatewood, Jr. Nashville: Vanderbilt UP, 1969.

Tannenbaum, Frank. *Darker Phases of the South*. N. Y.: G. P. Putnam's Sons, 1924.

Tate, Allen. *Jefferson Davis: His Rise and Fall*. N. Y.: Minton, Balch, Company, 1929.

———. "The Profession of Letters in the South." *Virginia Quarterly Review* 11 : 2 (1935) : 161-176.

———. Fathers. 1938. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1977.

———. "Understanding Modern Poetry." *College English* 1 : 7 (1940) : 561-571.

———. "The New Provincialism." *The Virginia Quarterly Review* 21 : 2 (1945) : 262-272.

Tindall, George B. "The Benighted South: Origins of a Modern Image." *Virginia Quarterly Review*, xl (1964) : 280-294.

Underwood, Thomas A. *Allen Tate: Orphan of the South*: Princeton: Princeton UP, 2000.

Twelve Southerners. *I'll Take My Stand: The South and the Agrarian Tradition*. 1930. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1977.

Vinh, Alphonse, ed., *Cleanth Brooks and Allen Tate: Collected Letters, 1933-1976*. Columbia: U of Missouri P, 1998.

Warren, Robert Penn. *John Brown: The Making of a Martyr*. 1929. Nashville: J. S. Sanders & Company, 1993.

——. *The Legacy of the Civil War: Meditations on the Centennial*. 1961. Lincoln: U of Nebraska P, 1998.

Wister, Owen. *The Virginian: A Horseman of the Plains*. 1902. N. Y.: Oxford UP, 1998.

Wray, Matt and Annalee Newitz, eds., *White Trash: Race and Class in America*. N. Y.: Routledge, 1997.

Young, Stark. "Not in Memoriam. But in Defense." *I'll Take My Stand: The South and the Agrarian Tradition*. Twelve South-
emiers. 1930. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1977.

越智博美「詩的南部連合 ニュー・クリティシズムと「南部文学」の誕生」『一橋大学研究年報』第三十九号、二〇〇二年、二五
三―二九九頁。

——「南部の男 共和国としての男の身体」鈴江璋子、上野達郎編『英米文学のリヴァーブ 境界を超える意志』開文社出版

二〇〇四年、一二二―一四八頁。

オルテガ・イ・ガセット、ホセ「芸術の非人間化」『オルテガ著作集3』神吉敬三訳 白水社 一九七〇年。

後藤和彦『敗北と文学 アメリカ南部と近代日本』松柏社 二〇〇五年。

ハント、リン『フランス革命と家族ロマンス』西川長夫他訳 平凡社 一九九九年。

ブルデュー、ピエール『ディスタンクシオン』石井洋二郎訳 藤原書店 一九九〇年。

フロイト、ジークムント『ノイローゼ患者の出生妄想』『フロイト著作集第一〇巻』高橋義孝他訳 人文書院 一九六九年。

ホフスタッター、リチャード『アメリカの反知性主義』田村哲夫訳 みすず書房 二〇〇三年。

宮本陽一郎『モダンの黄昏 帝国主義の改体とポストモダンの生成』研究社 二〇〇二年。